

150 年前の明治日本人の西洋体験

岩倉使節団

第 3 版



三 浦 良 著

2009 年 1 月 6 日

目 次

1	はじめに	3
2	「米欧回覧実記」(久米邦武編)について	4
2-2	岩倉使節団と「大君の使節」	
2-3	1870 年代の世界情勢	
3	アメリカ合衆国	7
3-2	驚きのアメリカ体験	
3-3	アメリカで目の当たりにした近代化の姿	
4	イギリス	10
4-2	ロンドンで驚いたこと	
4-3	貿易で世界一の工業国に発展	
4-4	イギリスの繁栄を支えたもの	
5	フランス	14
5-2	人を楽しませる街	
5-3	パリ・コンミュン	
6	ドイツ	16
6-2	後進国ドイツ	
6-3	鉄血政策でドイツ統一	
7	ロシア	18
7-2	「半開」のロシア	
7-3	日本の脅威でないロシア	
7-4	政略に利用される宗教	
8	イタリア	20
8-2	荘厳を極める教会	
8-3	西洋文明の栄枯盛衰	
9	西洋の政治・経済・文化の状況	22
9-2	ウイーン万国博覧会	
9-3	西洋の経済	
9-4	西洋の政治	
9-5	西洋の文化	
10	岩倉使節団の歴史的意義	28
10-1	明治初期の政治経済状況	
10-2	政治	
10-3	経済	
10-4	気風の改革(封建的諸規制の廃止)	
11	おわりに	32

1 はじめに

2009年6月2日、横浜港は開港150周年を迎える。この港は、1869年開港以来、日本を代表する国際貿易港として活躍してきた。当初、生糸とお茶、みかんの輸出と西洋の文物の輸入の港としてスタートして以降、今日では自動車の輸出と海外で生産された各種製品輸入の港になっている。この港は日本資本主義の基幹港として一貫して機能してきた。このため、開港150周年に併せて「開国祭」を行うなど、横浜の市民の多くの人々は「開港150年」「開国150年」に他ならないと考えている。

そこで、私は、この時期に開港の意義を開国の意義から見直してみようと考えた。開国とは象徴的にいえば閉じた社会が開いた社会へ転換することで、歴史的現実としてはこの国が西欧列強の仕切る国際社会へ強制的に編入されたことだ（「開国」）と、丸山真男が述べている。強制的かどうかは別にしても、新政府は生まれたときから、欧米列強のアジア制覇からこの国をどうやって独立国として造っていくかの解決策を出す宿命を担っていた。列強に植民地化された中国、インドの二の舞はなんとしても避けねばならない。他方で、新政府は「御一新」で進めてきた武家社会のリストラ事業を收拾して新しい社会をどう作っていくのかという課題も担っていた。実際の政治過程では、時々刻々変わる政治、経済状況の中で一貫した政策を貫くことできないが、開国の時代に新政府の指導者たちが、この国の未来像をどのように考えて、何をしようとしてきたかを見直してみたいのである。

2008年6月、慶応出版会から「米欧回覧実記」（以下「実記」と言う。）の現代語訳が出版されて、膨大で難解な漢文交じりの原典が容易に読めるようになった。この機会に読み直すと、150年前の明治日本人の初めての西洋体験の驚きや困惑の様子が今日の我々にひしひしと伝わってくる。

豪華なホテル、石造ビルに始まり、鉄道などのインフラ、学校、病院などの社会資本、製鉄、製糸、ガラスなどの各種工場、農業や各種産業技術など、どれ一つとして驚かされないものがなかった。驚きはこれらの有形物に留まらなかった。女尊男卑の風俗、熱心なキリスト信仰、商慣習、賓客を手厚くもてなすホスピタリティなどもまた、驚きの目で見つめた。

彼らの驚きを今日の我々もまたそのいくつかを迫体験することが出来る。例えば、パリの凱旋門、ノートルダム寺院、ベルサイユ宮殿やローマのコロシウム、バチカン宮殿、フィレンツェのベッキオ橋などは150年前そのままの形で残されているからである。のみならず、150年前と変わらずに施設を大切にしている西欧の文化の奥深さに、現代の我々が改めて驚かされるほどである。

しかし、この実記は単なる観光案内書でない。これは明治新政府の近代化モデルに向けた視察報告書である。使節団は新政府の若い指導者層が近代化モデルを現地へ調査しに行ったミッションである。メンバーには、初めは対抗する敵の囊中に入ると考えた人々も目指す目標の懐深く入ると考えた人々もいたと思われる。しかし、どちらであっても、西欧文明の圧倒的な物量や高度に発達した姿とそれを支える民衆をみて、西洋文明を「採る」必要性にとらわれた。帰国後の指導権争いを乗り越えて、このメンバーがこの国の近代化路線を主導することになる。これが近代化モデルのネタ帳という意味である。したがって、実記は西欧諸国の観光ガイドブックに止まらず、日本の近代化モデルのネタ帳としても見直す必要がある。

ところで、実記研究は、当初の外交史研究から平成期に岩波文庫化されて歴史学研究が進み、今日では文化思想史研究も盛んに行われている。最近では、新自由主義のグループがこの実記研究に取り組み、使節団は常に国を担う高い志で威風堂々としていたので今日でもその態度を学ぶべきだという。しかし、私はここには威風堂々の原点などはないと考えている。条約改正交渉が最初の訪問国アメリカで時期早喪として一蹴された経緯には独立国としての自信は微塵もなかった。ここにあるのは西洋と日本の文明の大きな落差である。視察で社会、経済、文化のすべての面で西洋と日本を比べて、大きな落差を目の当たりにして驚いている姿を見る。和魂洋才どころではなく、人、技術、習慣慣習、財政力、工業力のいずれの面でも、日本の国づくりの前になすべきことが山積し、それへの対応を考えると前途はあまりに遠くて愕然としたことだろう。にもかかわらず、彼らはその落差を落差のまま沈着に記録した。その冷静に書かれた事物が今の我々には新鮮で面白い。

実記が現代の思想的原点であるかどうかにかかわりなく、本書では、西洋文明の圧倒的な力量に目を奪われて、最初は驚き、次に酔い、終いには前後不覚（中江兆民）にあって、「脱亜入欧」になだれを打って進んでいった若き明治エリートたちの変貌ぶりを見ていくことにする。

2 「米欧回覧実記」(久米邦武編)について



岩倉使節団首脳。

左から木戸貴充、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利光。旅行の途中で多くのものがちよんまげを切り落とした。

「米欧回覧実記」は、編者の久米邦武一人が編集・叙述した岩倉使節団の欧米12カ国視察の記録である。各地で視察した記録だが、見聞した西洋事情をできるだけ広く国民に知らせたいと考えて「回覧実記」と名付けて発行された。(序文1、3)

「実記」は、使節団の公式記録ではない。しかし、フルベッキの助言で当初から企画されたこと、編集が大使事務局で公式記録と並行しておこなわれたこと、博文社という御用出版社が政府助成金を得て発行したことなどから、単に個人の著述でなく公的な報告書と言える。

「実記」の発行は明治11年10月(1878)で、帰国後5年かけて編集されて、その間に再三校訂された(序文7)。確かに帰国後のこの時期は、征韓論の確執、藩閥の動揺、佐賀の乱、西南戦争など大きな政治変動が繰り返されて、明治新政府が徐々にその構造と政策を固めていった時期であった。その新政府の意向に反するような記述や紹介ができなくなり、校訂が繰り返されたと思われる。例えば、彼らが直接聞いたビスマルクの力による外交政策演説のすぐ後に、彼らが直接聞くことがなかったモルトケの軍国論で「力による外交」を強調するなどはその例と思われる。

また、新政府は後にプロシアを下敷きにした近代国家形成へ向かうが、「実記」を読む限りでは、この段階では使節団は当時まだ二流国のプロシアを特別の国とは考えていなかった。彼らにとって、欧米の一流国の政治、経済、文化こそが日本が学ぶべき近代化モデルであった。

「米欧回覧実記」

明治4年(1871)11月から明治6年9月まで1年10か月にわたり岩倉具視を団長にして明治新政府のリーダーたち(「岩倉使節団」と呼ぶ)が米欧12カ国を歴訪した視察記録である。

使節団の目的

1876年に各国と締結した「修好通商条約」が明治5年に改正期限となっているため国内法整備を急いだが、それには先進国の制度の導入が必要で時日を要したため、改正延期が必要になった。そこで、①新政権の挨拶②条約改正の予備交渉③西洋事情調査を目的に使節団が決定した。

使節団の構成

(大使)岩倉具視、(副使)木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳を中心に、使節46名、随員18名の計64名。横浜出発時には留学生43名も同乗して総勢107名がアメリカ号で出発した。その特徴は、使節は薩長出身の新政府実力者、書記官は旧幕臣中心で、20～30代の若者で構成されたこと、また留学生は公家、旧藩主・士族らの多彩な顔ぶれで、開拓使派遣の女子5名で津田梅子(当時8歳)らもいたことである。

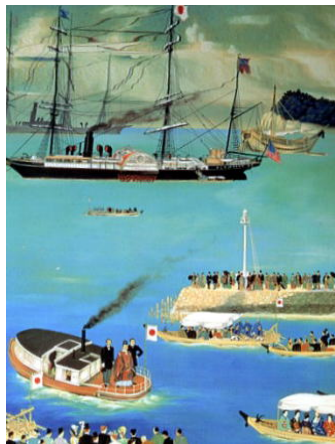
久米邦武



著作は明治11年発行で、全100巻、5冊、2,110頁。編者の久米は佐賀藩出身の漢学者。岩倉大使に随行して、(団の政治外交報告は別に公式記録がある)各地で見たものを報告書としてまとめた。客観的に描かれているが主観部分は2字下げ注記とし、300余の銅版画が挿入されてわかりやすい記録集となっている。

久米邦武 1839～1931。佐賀藩出身で藩校弘道館、昌平坂学問所で学んだ後藩主鍋島閑叟の側近になった。鍋島が岩倉に推薦して使節団に同行した。のちに、帝大文科教授、早稲田大学教授になった。

2-2 岩倉使節団と「大君の使節団」



使節団横浜出港図。山口蓬春画
米国の太平洋郵便会社の3本マストの外輪船のアメリカ号に乗船した。この航路は慶応3年1867年に開設されて5隻が就航していた。開通時の第1船はコロラド号で、小野使節団がアメリカへ武器購入のために乗船した。ハシケの後ろに突きだした部分が「象の鼻」と呼ばれた栈橋である。現在の大栈橋の基部に位置し、2009年開港150年を記念して、当初の姿に再整備する工事が進んでいる。

徳川末期に幕府は外交使節団を欧米に7回派遣している。特に、万延元年の遣米使節は、鎖国以来初めての遣外使で日本人だけで太平洋横断したこともあり有名である。これに対して、文久2年の遣欧使節は、幕府の公式使節団として各国で国賓待遇を受けたが（イギリス公使、オールコックはこの使節団を「大君の使節」と呼んだ）、その内容は知られていない。徳川末期の政治的混乱の中でその貴重な見聞を国政に反映できない状況で正当な評価を得られなかったため、と推測されている（芳賀徹著「大君の使節」中公新書）。

しかし、「大君の使節」の訪問国（都市）は、アメリカと欧州小国群を除けば岩倉使節団と重複が多く、ともに政府機関、工場、炭鉱、博物館、学校、病院等を精力的に視察した。「大君の使節」に同行した福沢諭吉は、その体験を「西洋事情」や「自伝」に著した。

岩倉使節団も、多くの人々が初めての西洋体験で、その旅は初めから不安と使命感と期待感がないまぜになった旅だった。最初は物珍しさや聞きしに勝る大規模で豪華な施設に圧倒されたり、怖気づいたりすることが多々あったが、旅が進むにつれて次第に驚きも薄らぎ、行く先々で施設がつくられた背景や制度の内容などを懸命に学ぶ様子を見ることができる。

岩倉使節団は、「大君の使節」と比べ、異様に大規模で長期間的だった。「大君の使節」が開港開市延期といった明確な外交交渉が主目的だったことに対して、岩倉使節団は、条約改正交渉の任務があったが最初のアメリカで交渉は行き詰まり各国と今後交渉しないと決定し、任務は西洋事情調査だけになった。

新政府は、M5年の条約改正期限が迫り、国際法に抵触する国内法改正等に迫られていた。しかし、国内法改正は近代化の大目標に向けて廃藩置県後の国内体制をどうするのかという大きな問題の一環であった。要するに、使節団は西洋モデルを一日も早く日本に採用し実施する見通しを立てる必要に迫られていた。

「大君の使節」はその成果を国政に反映できなかったが、岩倉使節団の場合は、その出張途中から西洋の文物の怒涛のような日本流入を引き起こすなどの成果を生み出した。

新政府がこの国の独立に向けた戦略を「富国強兵」に決定するのは、視察団が帰国した少し後で、視察団が西洋からもたらした成果は、殖産興業政策による国富の増強と軍事力の強化に次第に収れんしていくことになるが、それは使節団が意図したことではなく、後の政権による政策の結果である。

1	万延元年 1860	新見豊前守	アメリカ	日米修好通商条約批准
2	文久2年 1862	竹内下野守	仏、英、蘭、プロシア、露	開港開市延期交渉。「大君の使節」と呼ばれた。
3	元治元年 1864	池田筑後守	アメリカ	横浜鎖港交渉
4	慶応元年 1865	柴田剛中	フランス、イギリス	横須賀製鉄所建設調査
5	慶応2年 1866	小出大和守	ロシア	カラフト境界交渉
6	慶応3年 1867	徳川昭武	フランス	パリ万博
7	慶応3年 1867	小野友五郎	アメリカ	軍艦武器購入交渉

2-3 1870 年代の西欧情勢

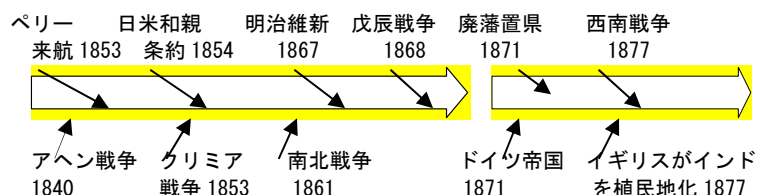
使節団は、1871 年（M4）11 月 12 日に横浜を出発して約 1 年 10 か月の視察を経て翌年 9 月 13 日に帰国した。

この時期の日本は、開国と大政奉還を経て、明治新政府のもとで廃藩置県など封建的諸制度の撤廃と近代国家建設が始まろうとした時期であった。

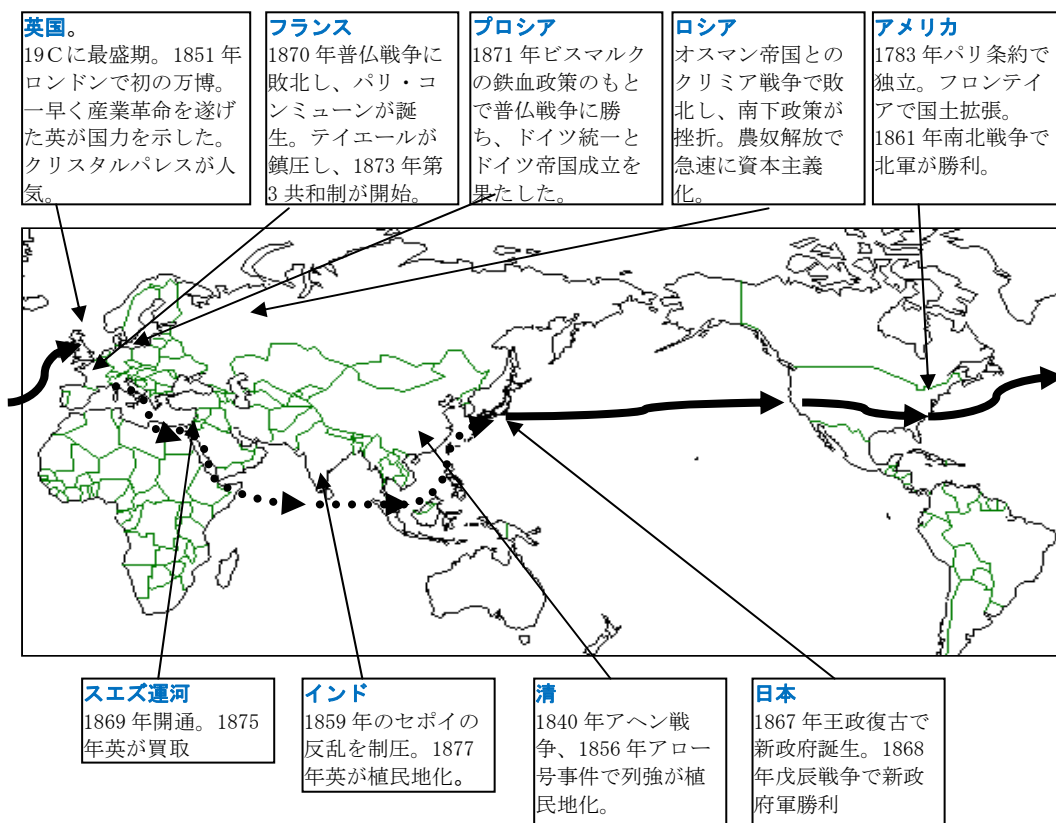
西欧でもこの時期は政治経済情勢が大きく変化していた。

1861 年イタリア王国成立、1866 年普仏戦争で敗れたオーストリアがハンガリー独立を受け入れて二重帝国を形成、1871 年普仏戦争で勝ったプロイセンを中心にドイツ帝国成立、フランスで第 2 帝政崩壊に続いたパリ・コンミュンをも平定した第三共和政成立、クリミア戦争で敗北したロシアは農奴解放で急速な資本主義化を始めていた。また、アメリカは 1869 年大陸横断鉄道開通で西部開拓時代が始まり、次第に経済大国として成長していた時期であった。

西欧世界は、18C 末にイギリスではじまった産業革命が各国に波及し、各国に資本主義が本格的に形成された時期である。次いで、欧米諸国は市場を求めて海外進出を積極化した。アジア、アフリカ諸国がイギリスをはじめとする欧米列強により植民地化されていった。



19C 半ば、大英帝国が最盛期を迎えた。1840 年アヘン戦争で清が敗れて産業革命が進む欧米列強がアジア進出を激化。1854 年ペリー来航で開国を巡り日本も倒幕運動が激化し、1867 年明治政府が成立した。



3 アメリカ合衆国

行程

M4 12/6～12/21	サンフランシスコ	ホテル、羊毛貿易工場、ウッドワード公園、湾周遊、鉱山機械工場、女学校、大パーティ、競馬場、ワイナリー等
12/21 ～M5/1/21	大陸横断鉄道	カリフォルニア鉄道、ロッキー鉄道、シカゴ鉄道等
1/21～5/4	ワシントン	ホワイトハウス、キャピタル、黒人学校、パテントオフィス、中央郵便局、農業振興局、アナポリス海軍兵学校等
5/4～5/16	北部巡覧	ニューヨーク、ハドソン川、ナイアガラ、ボストン等
5/17～6/21	ワシントン	避暑、大統領選挙、政党等
6/22～6/25	フラデルフィア	造幣局、監獄等
6/26～6/27	ニューヨーク	聖書会社、YMCA、百貨店、新聞社、中央電信局等
6/28～7/3	ボストン	大学、綿紡績工場、羊毛紡績工場等
滞在日数 205 日		



U・S・グラント

第 18 代米大統領 1869～1877
南北戦争の北軍の将軍。汚職とスキャンダルで史上最悪の大統領と言われた。岩倉使節団との会見ではキリスト教禁教政策を激しく非難した。1879 年大統領経験者で始めて来日。下関戦争で日本が払った賠償金のうちアメリカの分をもらう理由がないとして日本へ返還することに尽力した。その返還金で横浜港大根橋が築造された。

19C のアメリカは、米英戦争（1812～1815）の結果、モンロー主義（欧州とアメリカの相互不干渉宣言で、アメリカの孤立主義と呼ばれた）を採用し、欧州市場依存から西部へ領土を拡大する方針へ転換した。スペインからフロリダ、メキシコからカリフォルニア等を獲得した。この領土拡大は、1830 年ころから始まった産業革命にとっては国内市場拡大を意味し、鉄道や航路が発達した。

産業革命で北部諸州では工業化が進み欧州との競争で自国産業のため輸入関税による保護貿易を求めたが、南部諸州では黒人奴隷を使う綿花生産を主産業とする関税撤廃による自由貿易が主流であった。1850 年代になると、北部の産業資本家は工業化で黒人労働力が必要で、南部のプランテーション農業はイギリスからの綿花需要拡大でますます黒人奴隷に頼っていた。これに領土拡大による新天地への人口流出が加わった。

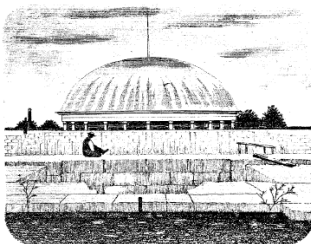
1861 年から 1865 年に起きた南北戦争は国を 2 分し、黒人奴隷解放と同時に農業資本に対する産業資本の勝利となった。又、この戦争中から始まった大陸横断鉄道建設も 1869 年に全通し、西部開拓時代が到来し、戦争を機にアメリカは北部、南部及び西部が国土としても精神的にも 1 つの国に統合された。

使節団は 22 日間の太平洋横断航海ののち、1871 年 12 月 6 日サンフランシスコへ到着した。当時この町は人口 14 万人、米国 10 位の都市と記録されているが、横断鉄道が完成し、ゴールドラッシュこそ終わったものの西部開拓時代の末期で、さらに海外へ新しいフロンティアを探す基地であった。

都心にある 5 階建てのグランドホテルに投宿して、工場、公園、学校、競馬場などを視察した。その後、一行は、開通して間もない大陸横断鉄道に乗ってワシントンを目指した。途中、ロッキー山脈で大雪に遭いつつ、ミズーリ川沿いにオマハを経てシカゴへ至る。この間は、ちょうどアメリカの西部開拓（フロンティア）が東から西へ進んでいる最中で、広大な荒野の開拓が進み、その後に近代都市を作っていく様子を目の当たりに見るようになった。

M5 年（1872）1 月 21 日にワシントンに到着し、グラント大統領らと会見した。2 月 3 日から使節団の使命の 1 つだった条約改正交渉に入る。しかし、交渉はその冒頭で、フィッシュ国務長官から天皇の委任状がなければ話し合いができないと一蹴されたのである。そこで、2 月 12 日から大久保と伊藤は委任状を得るために急ぎよ日本へ帰国し、4 ヶ月後の 6 月 17 日に使節団に合流した。その間も交渉は断続的に行われ、関税自主権や領事裁判権問題が難航した。そのため、大久保らが合流した当日、米側と第 11 回会談に入ったところで、対米交渉は中止になった。

3-2 驚きのアメリカ体験



モルモン教会堂

現在はユタ州の州都で、2002年冬季オリンピック開催地。町の西に大塩湖グレートソルトレイクがある。1848年東部から来たモルモン教徒が開いた町で、使節団はその20年後に訪問した。モルモン教は巨万の富をもつ教祖のもとで、7人の妻を持たねば天国へいけないなどを唱えたキリスト教の異教だが、教会のために人々が惜しむことなく寄付していた。



ブロードウエー

合衆国第1の都市でワシントンよりも大きく盛ん。米国各州では商業都市は首府と違う都市で、首府は政令を発するところで州の中心を選び、商業都市は物資の集散地で良港や交通の要衝に発達する。自主の市民は政府の税金を当てにして都市の繁栄を図ったりしない。

一行は、最初の訪問国アメリカで数々の西洋文明の洗礼を浴びた。

まず、サンフランシスコのグランドホテルの大規模さと完備された設備によって、西洋文明の豊かさに驚き、文明がもたらす便利さや快適さに圧倒された。次いで、大陸横断鉄道の寝台車で雪のロッキー山脈を越える旅でも、その物質的な豊かさや快適さを十分も味わった。

また、施設だけでなく、市民の熱心なキリスト教信仰にも大いに驚かされた。この熱心な信仰心には多少うんざりする面もあったが、人が神を敬う謙虚な精神が国を富ませ強くする原動力になっていることを発見する。

しかし、女尊男卑の風習については「不思議」「奇怪」と言い続けて、最後までなじめなかった。

①ホテルの規模、設備に驚く

サンフランシスコのグランドホテルで、5階建、約300の客室、300人収容の大食堂の大きさに圧倒される。ベッド、バス、トイレが完備された部屋には、ガス灯のシャンデリアが星のように輝き、顔を洗う水盤、メイドを呼ぶ電輪、机、鏡、せっけん、タオル、マッチ、コップ、ストーブが備わっていた。また、ホテルの床の大理石は靴が滑りそうに磨かれて、カーペット、イスは目が眩むほどきらびやかだった。（3章サンフランシスコ）

②女尊男卑に驚く

ワシントンのアナポリス海軍兵学校で、女性も軍学校の演習を一緒になって観覧し、演習後の舞踏会では男女がダンスを楽しむ様子は不思議な光景だった。もっとも奇怪なことは、男女の交際で、夫が妻に仕えている。夫が妻のために燭台をささげ、靴をはかせ、食物を取ってやり、階段の上がり下がりを手助け、座るときは椅子を按配し、道を歩くときは荷物をもってやる。妻の機嫌を少しでも損なうと愛している、尊敬していると言って身を深くかかえて詫言をする。西洋では大体同じような風習だが、米英は特にはなはだしい。（13章ワシントン下）

③寝台列車に驚く

オークランドから大陸横断鉄道で初めて寝台車に乗車。「両側をコンパートメントで仕切り、中央に通路があって、車両の前後に広い部屋があって、ストーブ、水盤、用水タンク、トイレがある。上のフックを外すとベッドが降りてきて、上下2段の寝台となる。車内の装飾は、天井に花模様、ペイント塗装と金メッキを施し、華やかで気持ちがいい。ランプがあって、夜も暗くない、大変便利な車両」と、感動した。これに乗ってシェラネバダ山脈を越えた。「山は重なって道は険しいが、列車は2重窓を開ざし、ストーブが暖気を送ってくるので、春風の中で銀世界を眺めているようだ。険しい山も花模様の厚い生地で張った座席にゆったり収まったまま越えていく。」

（5章カリフォルニア鉄道）

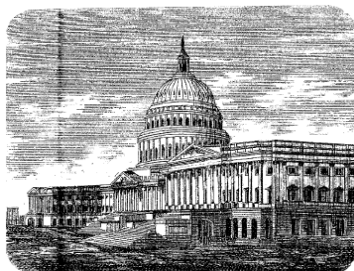
④熱心なキリスト教信仰に驚く

欧米人はいつも聖書を所持し、短い旅行でも持ち歩く。ホテル、監獄、病院にも置いてある。聖書は西洋の經典で、儒教の四書、仏典に似ているが、市民の尊敬の強さ、浸透ぶりはその比でない。人が神を敬う心（敬神）は、人の努力の根本で、良い品行を保つことは治安の良さを保証し、国家が富み強くなる基本条件。西洋人はよく、相手の国の宗教を調べたり、どの神を尊び拝するかを聞く。宗教をもたないとわかると心を失った野蛮人で用心して交際しないようになる。

聖書にあは、天からの声が聞こえたり、刑死者が蘇るというのは狂言、たわごとのように聞こえる。至る所にキリストが磔になった絵がある。まるでしょっちゅう、墓地を通り、刑場に寝泊まりしているようで、奇怪。礼拝日に毎週教会へ行くこと、親が子に教え、主人は召使に教え、ホテルでも客に勧める。仏教は最も劣った宗教と思えるほどだ。

（19章ニューヨーク）

3-3 アメリカで目の当たりにした近代化の姿



合衆国議事堂

1793 年 G・ワシントンが礎石を置き
1800 年竣工。建設費 1, 250 万ド
ル。ドーム上にクイーン・オブ・リ
バティのブロンズ像が立っている。
(上が使節団が見たもので銅版画、
下が現在)



ニューヨークの高架鉄道

鉄道を鉄柱で支持して街路の
6.7m 上空に架設し、蒸気車を
走らせる。この街の往来の混雑
振りは世界にも例を見ないほど
だ。このような街の真ん中に鉄
道を敷けば馬車の交通の妨げに
なり、通行人の怪我のもとにな
るがスう

一行は豊かな物質文明と厚い信仰心をもった勤勉な市民の驚きながら、それを支える社会制度についても注意深く観察している。

南北戦争が終結して急速に進み始めた工業化が、物的豊かさをもたらし、道路整備、郵便制度、学校などの社会インフラ整備によって社会全体の近代化が進んでいた。先走っていえば、イギリスに比べれば、産業もインフラもまだ発展途上であったが、イギリスを追い越さんばかりの力強さがアメリカにはあった。

また、大きな特徴は、アメリカは自立・独立の精神をもった市民が作っている国であることである。アメリカは「欧州の開墾地」で、ヨーロッパで自主のたくましい精神をもった者や自分で自立・発展しようとする者が来て作られた国である。だから、米は自主・自立の市民が集まって作られた真の共和国である。欧州からみれば無法者の群れだが、財産も知識も優れた人々が本国を見捨てて新たに国を起し、その後に移民してきた大勢の無頼を教育し開拓に向かわせて成功している国であった。

① 道路

道路は、街路樹、コルタール、木材で舗装されて、よく整備されている。西洋人には物を担ぐ習慣がない。馬にも荷を乗せない。それでも車輪が精巧で道が整備されているから物を運ぶ能力は日本人の数十倍。1 t は人 20 人分、馬 7 頭分だが、馬車なら馬 1 頭、線路なら 3. 6 k g の力で動く。道の整備状況をみると、政治の安定度、貧富の状態がよく見える。(10 章コロンビア特別区総説)

② 中央郵便局

町のポストから郵便物を集めてオフィスで分類し消印し、重量オーバーを区分する。郵便制度が完備したので、遠隔地でも数日でやり取りできる。急行宅配便がクモの巣のように張り巡らされているので、物品も遠くへ送れる。日本人は西洋を銀河のように遠い世界と考えるが、西洋商人は世界を一つの都会のように考えている。(13 章ワシントン)

③ 黒人学校

南北戦争で黒人奴隷が解放された。しかし、白人は同列に立つのを潔よしとせず、白人と同等の教育は与えるものの別の学校をつくっている。今も人種差別は歴然とある。皮膚の色と知能は無関係だが、10 何年かの後には教育の低い白人が黒人に使役されるようになるかもしれない。(11 章ワシントン上)

④ 新聞

建国以来書籍印刷は文明の普及に効果があるとして、全国で書籍が安く買えるシステムを作ってきた。その効果は全国的に見られて、実際にも書籍が安く、学問が大眾に広く普及している。(12 章ワシントン中)

アメリカには、政治ニュースを扱う新聞が 4, 328 社、教育ニュース 502 社、教会ニュース 407 社、芸術ニュース 207 社、商業ニュース 122 社などがあり、その盛んな発行は他国の群を抜いている。新聞は、国や州の政治を正し、学問、研究を盛んにさせ、貿易や殖産に刺激を与え、品行、風俗の美化の力になる。文明の前進のために重要な道具である。その編集者は人品に富み、博学で、大統領候補になるような人もある。その筆の力は 100 万の兵よりも強い。(19 章ニューヨーク)

⑤ 自由の弊害

ワシントンは物価高で風俗も悪く、窃盗も多い。NY では夜になると娼婦が闊歩し、いかがわしい街に変わる。人心が荒れている。共和国では自由の弊害が多い。貧しい人々が考える自由は「放縦」で、人に規制されたくないというものだ。上下の秩序に欠けるので、風俗が悪化する。加えて、世界中から移民が来るのでその傾向が強まる。(18 章フィラデルフィア)

4 イギリス

行程

M5 (1872) /7/13～8/26	ロンドン	シテイ、ウエストミンスター、 常設博覧会、造船所、英海軍、 動物園、宮殿、国会、ロンドン 塔、中央郵便局、電信局等
8/27～9/1	リバプール	商業取引所、ドック、造船所、 鉄道工場等
9/2～9/6	マンチェスター	ガラス工場、綿紡績工場、大砲 工場、巡回裁判所等
9/7～9/14	グラスゴー、 エデンバラ	紡績機械と機関車工場、同業組 合、機械博物館、トラクター等
9/15～9/18	ハイランド観光	荘園、キリー克蘭キー渓谷、 古城、上水路
9/19～9/21	ニューキャッスル	ラシャ工場、アームストロング 砲、炭坑等
9/22～9/25	ブラッドフォード	紡績工場、絹織物工場、毛織物 工場等
9/26～9/29	シェフィールド	鋼材工場、刃物工場、銀器・銅 器工場等
10/1～10/2	スタフォード州 ワーリック州	ビール工場、時計工場等
10/3～10/6	バーミンガム	ガラス工場、針工場、ペン工 場、貨幣鑄造工場等
10/7～10/9	チェシャー州	陶器工場、岩塩鉱等
10/10～10/15	ロンドン	ビスケット工場、農業博覧会、 ガス工場、農業振興局等
滞在日数 122 日		

18C後半、イギリスは産業革命を開始し、大規模な機械制工場により大量生産方式で安価な綿製品を供給した。1830年代にはイギリスは「世界の工場」として世界に君臨し、パクス・ブリタニカ時代を迎えた。1860年代になると他のヨーロッパ諸国でも工業化が進み、アメリカ市場が離反すると次にインド、中国市場への転換が進められるとともに、イギリス帝国の中核になる産業は工業から金融業へ重心移動し始めていた。

使節団は1872年7月13日ロンドンへ到着し、驚くほど精力的に視察をした。バッキンガム宮殿やビッグベン、電信局、造幣局、学校、大英博物館とともに、リバプールのドック、倉庫、マンチェスターの紡績・織物工場、製鐵所グラスゴアの商工会議所、ニューキャッスルのアームストロング兵器工場シェフィールドのビッカース兵器工場など、ほぼイギリス全土のあらゆる産業に及んだように見える。

視察を通じて、5大洋に商船隊を派遣し世界各地から資源を輸入し、自国で産出する石炭と機械の力でこれを工業生産物に変えて、再び世界各地へ輸出して繁栄するイギリスの姿を見て、イギリスの富強の源が高い工業力に支えられた貿易立国にあると考えた。

又、パクス・ブリタニカのもとで空前の繁栄を誇る大英帝国の政治体制が、「君臨すれども統治せず」を体現するビクトリア女王を頂点とする立憲君主制であり、広く社会に受け入れられて姿も見た。

近代文明が到達した頂上であるイギリスの産業や政治制度について、視察の案内役だった駐日公使パークスは、当時のイギリスが世界一の工業国で、世界の覇者であることを繰り返し一行に語っている。

4-2 ロンドンで驚いたこと

一行は、リバプール港でイギリスへ入国し、鉄道でロンドンを訪れた。10 年前の 1862 年、「大君の使節団」は仏から英仏海峡を渡ってロンドンへ来た。その印象を福沢諭吉は「人口 280 万。往来群集雲をなし、夜は 36 万の瓦斯の灯輝きて、晦日の闇も人知らず。昼夜絶えなき馬車の声、四海の波も音静、港につなぐ万国の船の眺めは森林、木の葉を散らす河蒸気、河に架けたる鉄橋を、走る蒸気車矢のごとく」と述べている(世界国尽)。

それと同じように、リバプールでは、貿易の中枢を占めるアメリカ貿易の中心港に停泊する船の多さと港の賑わいに圧倒された。そして、ロンドンでは、大きなビルが軒を連ねた歴史的都市でありながら、地下、地上、空中を道路や列車が走り回り、市民が忙しそうに動き回る近代都市の姿を見ることになった。

面白いことに、使節団は、現在の私たちが日々時間におわれる働き蜂で高い生活費、地価に悩まされている同じ光景を、150 年前のロンドンで見出していた。

① ワシントンや NY すら田舎町に見える

テムズ川にかかるロンドン橋までがロンドン国際貿易港である。川底トンネル(テムズ・トンネル)が走る。市内には、空中を走る高架鉄道から地下鉄道まであり、土木建設技術の極致。一番繁華なビジネス街のシテイ(オブ・ロンドン)には、市庁、銀行、取引所、海軍省、大蔵省等の巨大建物が並び、その広壮なたたずまいはワシントンやNYすら田舎町だったと思わせる。(第 22 章ロンドン市総説)

② 時は金なり

時は金なりと言いイギリス人は一瞬も足を休めず、熱心、勤勉に仕事をするのが習慣になっている。欧州のの諺に 6 時間の仕事を与えた場合、米人は 4h で終え後は散歩を楽しむ。仏人も 4h で終え、あとは酒を飲み歌ったり踊ったりする。英人は 5h で終え、あとは別の仕事にかかる。独人は 6h で終わらず残業をつづける。(同上)

③ 地価の高さ

ロンドンの地価の高さは異常で、土地を買うには 1 シリング銀貨を敷き詰めたほどの高額になるという。土地節約のため地下室を造り、上層は 8, 9 階にもなる。上の 7, 8, 9 階には収入が少ない人が住み、中間階にはやや生活程度が高い職工、商店の店員らが住む。下の階は商店になる。(同上)

④ 豪華なバッキンガム宮殿

宮殿には広い庭があって楼閣からの展望は広々としている。建物は石造で、柱、壁、梁に巧みな彫刻がある。内部にはきらびやかなタペストリーがあって、金色燦然、玉の光は玲瓏である。珍しい器物、宝飾品、名画で荘厳、華麗で目がくらみそうになる。それでも案内人はパリのチュイルリー宮殿に比べれば劣るといった。

(第 24 章ロンドン市の記 中)

⑤ 大英博物館

博物館の偉大さは欧州に轟いている。収蔵品が素晴らしく、学問を志し物事を研究する人は男女を問わず、研究題目を問わず、ここへくれば必ず得るものがある。図書室には 75 万冊の蔵書がある。ホールと呼ばれるアーチ状の本棚が壁の周辺に並び、部屋の中央に椅子があって本を借りる人には借用証を発行して貸し出して、ここで閲覧させる。室内は立派で美しく、造作がきちんとして大きい様子は目を驚かす。(第 25 章ロンドン市の記 下)



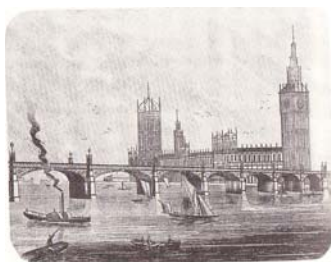
リーゼント・ストリート

当時ロンドンで最もしゃれた街として紹介されたが、今日でも同じである。



チャリング・クロス駅

鉄道が高架で家々の上を飛ぶように走る。大通りを越す時は石のアーチで支え、列車は雷のような音を響かせて、人々の頭上を駅から駅へ走っていく。乗客は八チの巢の群れのように集まり、アチが四散するように散っていく。



国会議事堂

大英帝国のパラメントで、建物の南端に 104m のビクトリア塔、北端に 98m の時計塔(ビッグ・ベン)が立っている。1834 年に焼失 1840 年から再建された。建物の周りの壁には精密な彫刻を施しており、内部の部屋の華麗なことは目もあやで、特に美しいのは上院だった。

4-3 イギリスの繁栄の源は産業と貿易

① 産業

イギリスは、18C後半にいち早く産業革命を開始して 1930 年代には本格的な工場制機械生産が普及した世界一の工業国である。

その中心的産業は綿、毛、麻の紡績・紡織と石炭、鉄、機械の 6 大産業である。当初は自国の羊毛を利用した毛織物業、続いてアメリカやインドから輸入する綿花を利用した綿工業が発展した。それら商品の多くはヨーロッパ各国だけでなく、原料を輸入したアメリカ、インドへ逆輸出されていた。

一行は、リプールの機関車製造会社で、その生産高の多さから英国内が機関車だらけになるのではないかと不審がると、ドイツ、オランダ、イタリア、ロシア、インド、オーストラリアなどへも輸出していると聞いて、鉄のもたらす利益の大きさに驚かされた。

てこ、滑車などの原理を利用して「人の力」を使わず「物の力」を利用する技術が発達し、これに鉄を活用することで機械を使う産業が発展した。軍艦、船、車、鉄道、橋は鉄そのもので、印刷、綿紡、織布、食器等は鉄でつくった機械で生産される。「日常目に触れるもの、社会の平安も文明も、鉄が形を変えて生み出した」ようだ、と述べている。

日本では、工業は贅沢品の生産のためといわれてきたが、イギリスの工業の目的は人々がより便利、快適に暮らすことができる製品を提供することにある。その工業にとって鉄の利用は有効である。「日本人も手先の器用さに頼って陶磁器、銅細工、漆工芸をわずかに輸出している。しかし、これが工業というのは間違いだ」、と諷めている。

日本でも中国から伝わった鉄利用技術は早くからあったが、「人の力」を使うことばかりを考えて「物の力」を利用することを怠ったため、工芸や技術が人の暮らしに役立ち国の経済力を高めることをしらず、また贅沢を生み出すものと考えたため、技術も衰退した、と久米は述懐している。

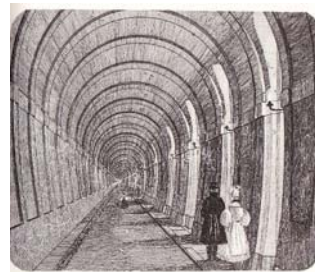
② 貿易

貿易は、商業と同じく、物産を生産地から消費地へ移動してその価値を高めるので、貿易は農産物でも工業製品でも利益を生む。

イギリスの場合、世界中から食料と工業用原料を輸入し、工業製品を輸出している。近年のインド貿易は莫大な利益を生み、レモンを絞るように最後の一滴まで絞り取ると評されている。世界貿易は、イギリス市場の景気が左右し、特に綿花はすべてイギリス経由でヨーロッパ各国へ送られるのでその利益も独占されている。ヨーロッパでは、工業の発達と人口増加で工業生産物と原材料、食料品の取引が増えて、貿易は年々拡大している。

各国は輸送手段の開発に熱心で、水上は船、陸上は車両が自由に走行し、交通の要衝には港湾施設や駅を設け、貸倉庫がある。都市でも、行政は常に商品が自由に流通するような制度を作り、商人が都市に商品を運びやすくできるように仕向けている。

イギリスでは、貿易を安定的に確保するため、国内の港湾や道路の整備だけでなく世界航路の要港に通信網を整備し、兵を派遣して貿易ルートを確保している。また、為替や海上保険制度なども整備されている。貿易に対する各種の政策はイギリスが貿易立国であることから生じるが、これによってイギリスは世界貿易の中心になっている。



テムズ・トンネル

テムズ川の最も下流の端がロンドン橋である。その下流はロンドン国際港で、橋の北岸に白い石造りの建物の税関がある。税関に隣接してロンドン・ドックがある。ドックの下流の河底にテムズ・トンネルがある。1843年にプラネルが作った高さ 7.5m、幅 3.6m の歩行者用道路。船が上を走り、人が下を歩くといって珍しがった。通気が悪く歩く人もいないため、鉄道会社を買って地下鉄に連絡させようとしている。



リバプール港

(マージー河口の浮き桟橋)

英国第 2 の都会で、1815 年アメリカとの講和条約締結以降、アメリカ貿易の中心港として急速な発展を遂げた。キューナード、ナショナルライン、ホワイトスター等の船社があり、毎日 NY へ 34 隻、ボストンへ 8 隻出港している。出入りする船が多く、船のマストがまるで林のようだった。貿易が盛んになるにつれて、港口にドック（港湾施設）が整備されて港の東岸に 10 km も連なっている。ドックは海から見ると城門のようで船は全てドックへ停泊する。このとき横浜港は象の鼻（ふ頭）があるだけで、船は沖合いに停泊し、はしけで桟橋と連絡していた。リバプール港で船が直接横付けできるドックと常備されたクレーンで荷捌きする様子を見て、インフラとしての港湾整備の重要性を改めて確認しあった。

4-4 イギリスの繁栄を支える独立自営農民

イギリスがヨーロッパの他の国々に先駆けて産業革命をなしとげその後の発展を支えたのは、独立自営農民層である。中世期にはこの小さな島国は牧畜を除けばこれといった農産物もない国に過ぎなかった。封建的荘園の下で農村に毛織物工業が発達し、農民層に富裕な者が現れた。彼ら富裕層は独立自営農民（ヨーマン）と呼ばれ、需要が高まってきた毛織物業を独自の力で経営し、没落した農民を雇ってマニファクチュア（工場制手工業）を進めた。毛織物業のマニファクチュアは材料の羊毛を確保するため農地を牧羊地にするエンクロージャーを引き起こした。彼らの生産力によってイギリスは、スペイン、オランダとの競争に勝利して世界の海上覇権を手にし、経済的には「産業の自由」を求めて、自営農民層はピューリタン革命を経て共和制政治を行うほどに成長した。この自営農民層が市民革命を引き起こした。彼らは商品生産と流通の自由を得た後に、産業革命を進めて石炭と鉄鉱石でできた鉄を使った機械で毛織物だけでなく綿織物などの紡績業を発展させた。

① 常設展示場

1856 年創設されたサウス・ケジントン博物館は、それまでのクリスタルパレスに代わって建設された常設の展示場。1851 年ハイドパークの第 1 回万国博覧会で英国製品は技術的には競争力が高いがデザインに劣ることがわかり、フランス製品の模倣をやめて自国のデザインを向上させるために建設した。会場には、工芸品、美術絵画、機械、道具、書籍などが陳列されている。ヨーロッパは現在富強になり、人々は快適な生活を送っている。しかし、これは 1800 年以降のことである。はっきり目立ってきたのはこの 40 年くらい前から過ぎない。18C 末産業革命が始まり、汽船、鉄道利用で貿易が一変した。55 年パリ万博で面目が改まり、フランス工業製品輸入が減少した。これを見てフランスでも展示場を作り、工業技術やデザインを進展させた。こうしてここ 10 数年のうちにヨーロッパ全域で展示場ができて工業技術が発展し始めた。農業、商業も同じである。（第 23 章ロンドン市の記 上）

②財産権の重視

イギリスでは「財産権の保護」が政治の目的になっている。国益すなわち国家の富強を目指すには、国民がその財産を重んじて、立法もまた、国民の財産権の尊重を最も重視しなければならない、と考えている。東洋では長い間、農耕で自給自足だったから「修身」が政治の根本とされ、権利意識を抑制することが大切にされてきた。しかし、西洋ではローマ時代から交易を重視してそのための共同体をつくるのが政治の中心であった。今や、世界は海上交通が盛んで、貿易の時代である。東洋でも国益を保つためには国民が一丸になって財産権を重んじ、富強を達成することに意を注ぎ、産業や貿易の発展を進めていく必要がある。（第 24 章 ロンドン市の記 中）

③植民地

イギリスは 5 大陸に植民地をもち、世界の航路を支配下におく。貿易はその航路に沿って展開されて、各拠点に軍事基地が設けられている。かつてのスペインのように、今はイギリスが「太陽が沈まない国」である。植民地では、イギリスの国民や産業が必要な紅茶や綿花、麻だけでなく、インドでは中国向けのアヘン、西アフリカではアメリカ向けの奴隷なども取引している。（第 21 章 イギリス総説）

④インフラ整備

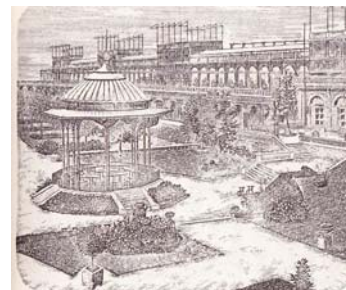
リバプールはアメリカ貿易の中心港で、延長 10 km に及ぶ埠頭、クレーンや穀物倉庫などが整備されている。貨物の輸出入には、これら港湾インフラが必要で、港の商業的価値を著しく高めている。（第 24 章リバプール市の記 上）

郵便は特に大切にされ国の仕事の大きな部分を占める。人口 5 千人に 1 局を作り、切手を張って各地のポストへ投函すると決まった時間に郵便夫が集め、局では麻袋へ入れて鉄道で運ぶ。海外も定期的に郵便船が運航されて配送されている。船では小荷物のような物品も遠くへ運ぶことができる。電報は年間 1,270 万件で 80 万ポンドの利益を生み出している。国内はもちろん、海底を経て海外のスエズ、アデン、ボンベイ、ペナン、シンガポール、オーストラリアに至る。地球の約半分を結んで世界中の情報が毎日集まる。（第 25 章ロンドン市の記 下）



クリスタル・パレス

1851 年第 1 回万国博覧会の展示会場である。当初はハイドパークにあったが、万博後サイデンハムへ移転し、植物園、水族館になった。10 年前の「大君の使節」も第 4 回ロンドン万博を視察し、幕府が出展した大量の書画骨董をみた。



サウス・ケジントン

1856 年につくられた常設の博物館。イギリス製品の技術振興のために様々な品物を展示していた。

5 フランス

11 月 16 日、ドーバー海峡を船で横断してカレーから列車でパリの旧トルコ公使館宿舎へ到着した。煤煙黒霧のロンドンからパリへ来て、さながら「天堂」に入ったようだといって「驚く」を連発することになる。

この 80 年に政権が 6 回も変わった国で、国内情勢はいつも不安定であった。フランス革命の担い手だったブルジョアジーは、政治的混迷を収拾して市民革命の成果を守る強力な指導者として 1848 年ナポレオン三世を迎えた。

ナポレオン三世は、大規模なパリ改造計画(ジョルジュ・オスマン)や国内の鉄道網整備など大規模なインフラ整備を通じて工業化を推進した。この社会資本整備は、失業者の雇用拡大を進めると同時に労働関係法の整備も進めた。フランスの資本主義化はここで急成長した。しかし、1860 年代イギリスからの工業製品流入で国内産業が打撃を受ける中で開始した 1870 年普仏戦争の最中に第二帝政は崩壊し、パリ・コンミュンが成立した。約 2 ヶ月の短命な労働者階級による政権奪取で、1871 年 5 月にテイエールらの新政権が誕生した。

使節団が訪問したのはこの頃であった。戦争と革命の跡があちこちに残るパリだったが、その豪華絢爛さと整然とした美しさで人々を魅了する街であった。

✎ 行程

M5 11/16 ~ 11/17	パリ	凱旋門、チュイルリー宮。ルーブル宮、ブールバール、公園
11/18 ~ M6/1/18	パリ	テイエール大統領謁見、ベルサイユ宮殿、ノートルダム寺院、サンジェルマン離宮、国会図書館、展示場、造幣局、
1/9 ~ 1/14	パリ	墓地、鉄工所、サンクルー村、セーブル陶磁器工房
1/15 ~ 1/18	パリ	サンシール士官学校、ベルサイユ宮殿、地下下水道、モンバレリア要塞、パン工場、陸軍病院
1/19 ~ 1/21	パリ	フォンテンブロー宮殿、土木建築学校、鉱山学校
1/21 ~ 1/22	パリ	コブラン織物工場、チョコレート工場、天文台、最高裁、監獄、ラジャ工場
1/23 ~ 2/16	パリ	金銀銅器工場、ろうあ学校、盲学校、動物園、化粧品工場、弾薬工場
滞在日数 70 日		

5-2 パリ・コンミュン

使節団は至るところで 1 年前のパリ・コンミュンの跡を見た。凱旋門は砲弾跡を補修中だったし、テイエール大統領自身がパリ・コンミュンを弾圧した張本人で、久米はテイエールを老練熟達政治家、コンミュンを反徒と呼んだ。

パリ・コンミュンは、1871 年 3 月 26 日から 5 月 20 日にわたってパリで民衆が蜂起し、労働者階級によって設立された革命政府であった。マルセイユ、リヨンなどでもコンミュンができたが、いずれも短期間で鎮圧された。

ナポレオン 3 世の第 2 帝政が 22 年継続し、国内平和を維持し、工業、貿易を盛んにした。1870 年 7 月普仏戦争中に皇帝が退位し、代わって臨時国防政府が戦争を継続したが、71 年 1 月降伏した。しかし、パリ民衆はこれを認めず、蜂起して革命政府・パリ・コンミュンをつくった。パリ・コンミュンは、教会と国家の政教分離、無償の義務教育、婦人参政権などの政策を打ち出した。K・マルクスは、これを労働者階級の国家として位置付けてコンミュンからプロレタリア独裁革命の理論が形成された。

政府軍は、コンミュンとは別に、71 年 2 月保守派・国民議会のテイエールを長とする新政府を作り、ベルサイユに臨時政府において、コンミュン軍を鎮圧した。戦闘では 3 万人の市民が死亡し、1 万人が死刑に処された。

5-3 人を楽しませる街・パリ

パリには、輝くような高層の建物が街の両側にそびえ、街路は石畳で街路樹、街路灯が並ぶ。店には美しい商品が並び、レストランには客がのんびりと群がっている。ロンドンを除きこれほど盛んな都市はない、世界で最も美しい街、と言ってたえた。その様子は、今日の我々が見る光景と同じである。

150 年前の使節団によってパリの案内をしてもらっているような感さえる。

①シャンゼリゼ通り、コンコルド広場、凱旋門

シャンゼリゼ通りは幅 120m の直線道路で凱旋門からコンコルド広場へ達している。両側に 2 筋の並木があり、夜にはガス灯がともって地平線まで珠玉が続く。コンコルド広場はフランス革命時ギロチン台が置かれた場所だが、敷き詰めた白砂が雪のようで 1 つのゴミもない。夜ガス灯がつくと星空を逆さにしたようで、シャンゼリゼの灯りがつなげて、絵の中にいるようだ。（第 42 章パリ市の記 1）

②パレ・ロワイヤル

ルイ 14 世時にリシュリーが大きな宮殿だったものを、階下を商店街に改装した。珍しいおもちゃ、しゃれた商品を売っている。酒場、レストランもあって、中央の庭には木々があり、夜にはガス灯が輝いて四方の商店の陳列品が反射して庭中に黄金の気配が充満。（同上）

③ノートルダム寺院

外壁の彫刻や唐草彫が精緻を極めており、内部も複雑に美しく装飾されて、金色に輝き目くらむほどだ。2 つの塔の頂上はまだ未完だが、美の極致と言ってもよい。プロテスタントの国には壮麗な教会は少ないが、カトリックの国では都市の中心に寺院がある。その建築の美しさを日本（本願寺）と比べると、大きなビルと草庵の違いがある。キリスト教が人々の財産を教会建築に費やす規模は驚くばかりだ。カトリック国では、教会の尖塔が天に突き刺さるようで、市街地には巨大な教会がそびえている。街の店もいたあるところにマリア像や十字架に架けられたキリスト像が並べてあり、見るのが嫌になるほどだ。（第 43 章パリ市の記 2）

④ベルサイユ宮殿

高々とそびえて壮麗、水や石組み、林、泉の庭園が広々して、欧州中でも比類ない大宮殿。ルイ 14 世の寝室には衣服、ベッドが往時のまま飾られて荘厳。美しさに充ち溢れ、匠の限りが尽くされ、あらゆるところに彫刻、刺繍が施されて黄金と宝石がきらめいている。ベルサイユは壮大で、美しさで 1 等地を抜いている。（第 45 章パリ市の記 4）

⑤フォンテンヌブロー宮殿

ナポレオン 1 世が好み、ワーテルローで負けた後もここに入り、帝位を去る時もここで別れを告げた。歴史の舞台で観光名所。部屋毎に様式が違い、装飾が変化する。廊下も美しい限りで、装飾の多さはここが 1 番。（第 46 章パリ市の記 5）

⑥パリの下水道

地下 8m くらいで、大溝（幅 4m）、中溝（1.5m、高さ 3m）、小溝（1.5m、高さ 3m）、さらに細い支管となる。大きなアーチの形で両側に歩道があり、上に上水管や電線が吊ってある。雑排水が流され、糞便は夜中に田舎へ運ぶという臭気が強く長い間は入って入れなかった。1850 年ナポレオン 3 世の発案で建設した。（第 45 章パリ市の記 4）



凱旋門



シャンゼリゼ通り



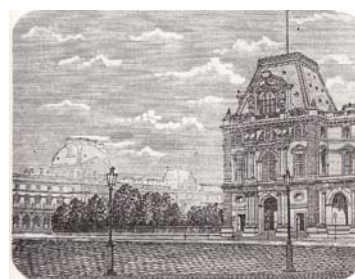
コンコルド広場



ノートルダム寺院



ベルサイユ宮殿



6 ドイツ

ドイツはヨーロッパでは最も統一が遅れた国であった。ナポレオン没落後の 1815 年ウィーン会議で始めてドイツ連邦の体裁をとったが、当時は 35 君主国と 4 自由都市からなる連邦制で、集合体で、これが産業の発展を遅らせた。外国への経済的対抗と国内市場統一と自由な産業活動を求める産業界の要請で、プロシアの主導で 1833 年ドイツ関税同盟が発足した。1861 年プロイセン国王にビルヘルム一世が即位すると、列強に追いつき、追い越すために、ビスマルクの戦略の下で産業保護と軍備拡張による発展を目指した。ビスマルクは、ドイツ連邦の結束を図りつつ、1866 年普墺戦争、1870 年普仏戦争に勝利して、1871 年占領下のベルサイユ宮殿でドイツ統一を宣言した。

3 月 7 日、使節団は、プロシア入りの初日にエッセンのクルップ兵器工場を視察後、3 月 9 日にベルリンへ到着し、誕生したばかりの新生ドイツ帝国を訪問した。

M6 年 3/7～3/8	エッセン	クルップ兵器工場
3/9～3/11	ベルリン	テイーアガルテン、動物園、水族館
3/12～3/15	ベルリン	王宮、シーメンス電機工場、博物館、陶器工場、美術館、ビスマルク招宴
3/16～3/20	ベルリン	兵器庫、モンビジュー城、ソーダ水製造所、印刷局、天文台、兵営、電信局
3/21～3/29	ベルリン	監獄、ベルリン大学、消防署、市庁、鉄工所、ノイエパレス他宮殿
4/16～4/17	ハンブルク	* ロシアからの帰途ハンブルク港、キール港
5/1～5/3	リュウベック他	* スエーデンからの帰途漁業公社ほか
5/4～5/5	フランクフルト、	パルメンガルテン、紙幣印刷工場
5/5～5/7	ミュンヘン	ホップ市場、美術館、孤児院、
滞在日数 33 日		

6-2 二流国ドイツ

ドイツが日本で知られるようになったのは、19 年前に長崎に軍艦が入港したときからである。1861 年の和親条約締結時にも欧州の強国という程度しか知られず、近年、普仏戦争で仏を破ったことで広く知られるようになって、貿易も増加している。

国の勢いとともに、ベルリンも発展してきたが、まだ二流の都市である。ドイツ連邦各国にはみな大貴族がいて城館をもっている。都市に商品が集まるのも貴族の動向による。近年封建制度の名残を取り除き、生産業者や商人の活動が活発化し、競争も盛んになってきたところである。新興都市である。だから、一般の気風は素朴で他都市のように軽薄なところがない。しかし、「繁盛するにつれ次第に墮落し、頹廢的になってきた。また、外征が多いため人の気分が激しくなって振る舞いが荒々しい。学生と兵士が威張っている。

・

(第 57 章ベルリン市総説)



ブランデンブルグ門

市内で最も美しいところで、ここからウンター・デン・リンデン街の大通りが伸びている。中央は馬車の道、両側に街路樹を植えて 2 筋の長いプロムナードになっている。公園には必ずピヤホールがあって男女がテーブルを挟んでビールのジョッキを傾けてひと時を楽しんでいる。

ベルリンはプロイセンの首都で欧州第 4 位の都市だが、120 年～130 年しかたっていない新しい都市。市内にたくさんの運河があって水運に利用されているが、オランダや英仏の都市とは様子が違う。建物も石造で大きく、タイルの花模様や石の彫刻が柱や屋根におかれているが、金色に光り輝くような彫刻、模様は少ない。

6-3 鉄血政策でドイツ統一

長い間、分裂状態にあったドイツは、ナポレオン戦争後に始まった産業革命で成長する産業資本家を中心にドイツ統一機運が高まった。

北部ドイツの有力国家だったプロイセンでは、ビルヘルム一世のもとで、ドイツ最大の国家でありながら非ドイツ系住民を多く持つオーストリア帝国を普墺戦争で破り、ドイツ人を中心とした君主制の国家建設を開始した。（小ドイツ主義）。

ドイツ統一を目指すビルヘルム一世は、1862年その片腕にビスマルクを首相兼外相に起用し、普仏戦争に勝利して統一を遂げた。

ビスマルクは、就任早々に、軍事費の追加予算を議会に承認させるために、ドイツ統一は演説や多数決でなく、鉄（大砲）と血（兵隊）によって解決される、と鉄血政策を主張した。

一行は、3月11日ドイツ皇帝ウイリヘルム一世に謁見し、翌日宰相ビスマルクや名将モルトケと会見し、3月15日ビスマルクの招宴に出席した。その席で一行はビスマルクの「力の外交政策」演説を聴いた。そして、「実記」には別途議会でを行ったモルトケ演説も掲載し、万国公法よりも「力の論理」が優先するドイツの外交政策に一行は鮮烈な印象を受けた様子をうかがうことができる。

ビスマルク演説

世界各国は親睦と礼儀を保ちながら交際している。しかし、これは建前で、裏ではひそかに強弱のせめぎ合いや大小国の相互不信があるのが本音である。

国際法は、各国の権利保全の原則的な取り決めだが、大国は自分に利益があればそれを守り、不利益になると軍事力にものをいわせる。国際法を常を守ることはあり得ない。小国は国際法の理念を守って自主権を守ろうとするが、力任せの政略に合うと自分の立場が守れないことはよくあることだ。

我が国もそんなことがあったので、憤慨し、国力を強化してどんな国とも対等に外交をしようと考えてきて、近年ようやくその望みを達した。

ところが各国は、プロイセンが侵略を好み、他国の権利を侵す国といって非難でした。これはわが国の意図に反する。国権を重んじて各国が台頭に相互に侵略しない公明正大な世界にしたいと考えているだけだ。

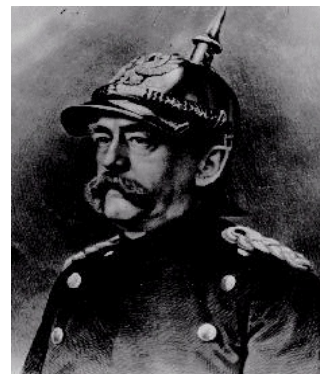
英仏は植民地を搾取し、その物産を利用して国力を強めている。他国は皆その行動に迷惑している。ヨーロッパの平和外交は信じられないと思うが、その気持ちはよくわかる。ドイツこそ日本が親しく交際できる国である。・

（第58章ベルリン市の記 上）

モルトケ演説

政府は儉約を大切にするあまり、国債の減や減税だけを考えてはいけない。歳入はすべて国家の急務に費やし、海外に国威をふるうことが優先されるべきだ。海外の利権を守るには武力以外役に立たない。国際法順守のみは小国の行動で、大国は武力で国家の意思を貫く。軍事費を節約して平和的事業に回すことは誰もそうありたいと考えるが、いったん戦争になれば、その蓄えはたちまち消費する。まず軍備を固めて武力でヨーロッパの平和を守ることが大切だ。

今は平和だが、今後戦争がないとは保証できない。一旦平和が保てなくなったら、速やかに戦ったほうがよい。ドイツが望んでいるのは平和を保持することだけでなく、世界平和を自らの手で保ち、ドイツがヨーロッパの中心で全ヨーロッパの平和を擁護していることをあらゆる国にいわせたい。（同上）



ビスマルク

プロイセン王国の首相（1862～1890）、ドイツ帝国初代首相（1871～1890）。ウイリヘルム1世の片腕として鉄血政策を打ち出して軍備拡張を進めた。普墺戦争、普仏戦争に勝利してドイツ統一を成し遂げた。

7 ロシア

サンクト・ペテルブルグはベルリンから 1,600km、国境から 890km。ロシア鉄道で荒野を三日三晩走って到着した。荒れ果てた原野のただなかに華麗な建物が並ぶ雄大な都市がになって現れて、到着した。

ロシアは、ナポレオン一世のロシア遠征に勝利した後、不凍港確保のため汎スラブ主義による「南下政策」の下で対外戦争を繰り返した。1853 年ニコライ一世は、聖地管理権をめぐりトルコへ侵攻してクリミア戦争を起こしたが、英仏が参戦して敗北した。戦争中に即位したアレクサンドル二世は、ロシアの後進性を痛感して、ロシア近代化を目指した。

1861 年農奴解放令で開放された農奴は、農村で小作農となり、また都市へ流入して労働者になった。ロシアの産業革命が本格的に開始されたのである。

使節団が訪問したロシアは、最近 20 年間に急速に発展したが、政治は専制政治で、教育・文化は古い宗教の迷妄の段階だった。

M 6 年 3/29~31	ロシア鉄道	
4/1~4/6	サンクト・ペテルブルグ	ロシア政庁、農業博物館、エルミタージュ美術館、皇帝謁見、造幣局、弾薬工場
4/7~4/9	サンクト・ペテルブルグ	紙幣印刷所、製紙工場、図書館、海軍工廠、孤児院、ろうあ施設
4/10 ~ 4/15	サンクト・ペテルブルグ	軍服工場、鉱山機械博物館、解剖研究室、製鉄所
滞在日数 18 日		

7-2 「半開」のロシア

パリから東へ行くにつれて、文明の度合いは薄れて、ロシアは荒野か深い森の国のようだった。荒野の合間に人家がぼつ、ぼつとあって、アメリカの大平原を思い出させるほどだった。一行が訪れたサンクト・ペテルブルグは、荒野に忽然と現れた都市であるが、その外観を見ると、街並みは整然としており、壮大な建物が立ち並ぶ大都市であった。首都サンクト・ペテルブルクは、66.7 万人、9 月から 4 月まで港が結氷する。

英、仏、ベルギー、和蘭では貴族より平民の中に優れた人物や富豪が多いので、全国的に繁栄し、民権も盛んだといわれる。独、奥、伊は貴族の富裕度が平民を超えている。文化に見るべきものはあるが、全国的にはまだ貧しさを免れていない。そこで君主権が民権より強い。ロシアは全く貴族だけが文化的な暮らしをし、庶民は奴隷のようである。富が上層階級に独占され、人民は専制のもとに抑圧されているのもこの社会構造のためである。そこでロシア貿易は不振になり、利権は外国人に独占される。(62 章ロシア鉄道とサンクトペテルブルグ総説)

貴族だけが文化的暮らしで富が上層部に独占されて、庶民は奴隷のようにみえる。庶民はやっと農奴から解放されたが、国家財政はひっ迫。しかし、帝室、皇族、貴族は財産を増やし、宮殿を築造するが、人民はまだ「半開」の状態だった。

ロシアの農奴は 12 年前の 1861 年に開放された。以前は、領主から貸与された土地を耕す農民（農奴）の多くは奴隷状態で自由を得ているものは少ない。農民は貧弱な家、中には穴居生活に近い者もいる。大都市には大きな建物が軒を並べていて、輝くように壮麗に見える。貧富の差が著しい。農奴解放で、地代の 20%払い残りを 49 年間で支払うと自ら地主（自作農）になった。日本の場合昨年 2 月田地勝手売買が許されたので、法令一下、不動産の所有者になったが、ロシアでは買い取った。政治風俗の違いが大きい。(第 61 章 ロシア国総説)、



ピョートル大帝

若い頃オランダで造船を学び、1682 年帝位についた。バルト海に海軍を創設しスウェーデンと戦い、1704 年首都をサンクト・ペテルブルグへ移した。ロシアが領土を広げるときは、他国を侵略して支配下に置くと、自国の政策にはなはだしく背かない限り各地域の古い慣わしを存続させ強いて改めない。ピョートル大帝時に欧州の強国の 1 つになった。



ネバ川の船橋

サンクト・ペテルブルグは寒さは厳しいが夏の暑さも相当だ。4 月に凍った川が溶け出して冬中凍りついていた汚物が一気に溶け出して腐敗臭がする。これで流行病も発生する。氷が解けるとネバ川に船の往来が始まり、盛んに交易が行われる。炎暑時には 32℃もなるので、貴族や金持はドイツ、スイスへ避暑へ行く。9 月には雪が降り、10 月に川は凍りはじめ、来年 3 月一杯まで氷に閉ざされる。冬には日光は 6 時間ほどで残りの 18 時間は夜の中である。

7-3 日本の脅威でないロシア

ヨーロッパで最も勢力がある国といえば、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、ロシアの5カ国があげられようヨーロッパの各国が強弱、大小それぞれにバランスを保って独立を全うしているのは、これらの5大国が互いに国の勢いを平均させようとけん制しあっているからである。その中で最も強力なのは英仏である。最も遅れているのがロシアである。西洋人は未だにロシアをトルコが少し近代化したようなものだという評価から出していない。

(第65章サンクトペテルブルグ市の記 下)

しかし、日本人は、英仏よりもロシアを恐れている。人々は、英仏はオランダと同じような商業国で、ドイツとオーストリアはヨーロッパの覇権を狙っている国で、ロシアは最大最強の世界征服を狙っている国と考えている。ロシアはヨーロッパでは遅れた国であるのに、日本では英仏よりもロシアを恐れている。

昔の元和堰武以降（元和元年の大坂夏の陣を最後に戦乱がなく太平になった）、英、西、葡と国交を断ち、キリスト教を厳禁して外国がわが国をうかがい知るのを拒否することで国家の安寧を保持することが200年余り続いた。ところが文化元年（1804）9月にロシア使節レザノフの軍艦が突然長崎に来て発射した礼砲の響きが、全国の太平の夢を驚かせた。これ以来攘夷・鎖国の論議が全国に激しく巻き起こった。この文化年間から嘉永・安政に至るまで、鎖国を論じる人々が国際情勢を考察するに際しては、まずロシア恐るべしという先入観が生まれた。

ロシアの状況は前面ではプロイセン、オーストリアの2大国と隣接し、トルコによって海への出口をふさがれている。ロシアは地中海或いはアラビア海に向かう門戸をなんとか開こうという欲望をもつ。ロシアの政略進展の鍵は小アジア、西アジアにある。日本が鎖国の夢から驚き冷めたことの名残が、ロシアにはトラや狼のような猛々しい心があるという妄想を生じさせており、両国人の間に奇妙な1つの幻想がある。（同上）

今のロシアには日本を併合する力はない、妄想である。諸国をトラや狼という疑いの心で見るとか親睦の心で見るとかの違いであり、各国と常に政略を用いながら交際するならば、我々が最も親しむべき国が英仏か、ロシアか、ドイツ、オーストリアかについて、世界の真の状況を見極めて、しっかり調査して判断する必要がある。（同上）

7-4 政略に利用される宗教政策

ヨーロッパの人々は宗教に心が結びついている。その信仰の強さは何にも勝り、人間関係、政治、軍事にも大きな影響力を持つ。これは人間道徳を中心に据えた政治に育った東洋人には理解しがたい。

ナポレオンはロシア遠征で、仏の国威がこの戦いにかかると思いがちだったが意気は上がらず、これに対してロシア軍はギリシャ正教の敵がフランスで、正教の攻防がかかっていると聖職者に説かせて愚かな民衆を奮い立たせて、仏軍を壊滅した。

ヨーロッパでは人心をまとめるのに宗教が使われる。宗教問題による戦争は相互に憎しみに狂ったライオンのように激しくなる。スペイン王フェリペ2世はカトリックに改宗させようとしたため、オランダ人の反感を買って、敗北した。しかし、その後ナポレオンがオランダを侵略したときは朽木が押しつぶされるようなあつけない負け方をした。国のためという感情は信仰を守る感情のように人心を奮い立たせないことは明白である。（63章サンクトペテルブルグ市の記 上）

ロシアではロシア正教を採用し、教会が国民生活と密接な関係。一見宗教を大切にしているようだが、人心掌握と規律に従わせる政略に使っている。

8 イタリア

5月7日夜ミュンヘンを発って、インスブルックを経て9日早朝フィレンツェに到着した。イタリアではフィレンツェを皮切りに、ローマ、ナポリ、ベニスを訪れた。

イタリアは中世以降、権力分裂状態が長く続き、フランス革命以降数度の独立運動が繰り返されたが、イタリア半島が一つの国家になったのは1861年である。成立当初はローマ教皇の支配下のローマやオーストリア帝国の支配下のベネチアは含まれていなかった。その後、1866年普墺戦争に勝利してベネチアを獲得し、1871年普仏戦争でローマを併合し、首都として遷都を行って、今日我々が見るイタリアとなった。

使節団は統一直後のイタリアを見るのだが、長い間の政治的分裂のもとで、人々は怠惰で文明発展に対する国民の意欲が失われているようだ。街のいたるところにある古跡をみると、昔のイタリアがいかに盛んだったかがわかるが、対照的に現状はすっかり衰えていた。

M 5	5/9 ~ 5/10	フィレンツェ	サンタマリア大聖堂、トスカーナ宮、政庁、モザイク製造所、養蚕業、オリーブ農場
	5/11 ~ 5/12	ローマ	バチカン市国、パンテオン教会、コロシウム
	5/13 ~ 5/19	ローマ	バチカン市国、浴場、兵営、病院、ローマ水道、教会
	5/20 ~ 5/26	ナポリ	ベスビオ火山、ポンペイ遺跡
	5/27 ~ 6/2	ベニス	旧政庁、サンマルコ教会、ガラス工房
	滞在日数 26 日		

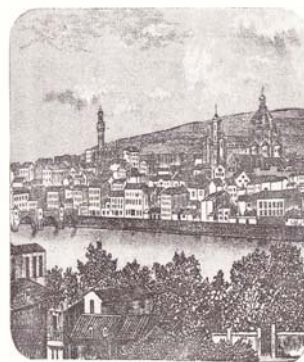
8-2 荘厳を極める教会

フィレンツェは人口 16.7 万人で都市美に優れた街だが、市内には 250 の教会があつていずれも執拗なばかりの装飾が施されている。ローマは、市内全部が教会ばかりではないかと思えるほど数が多かった。

フィレンツェのサンタ・マリア教会は、13C 着工で 140 年かけて完成した。高さ 107m、最大幅 90m、長さ 153m の大きなものである。

ローマのサン・ピエトロ寺院は、17C に完成し、高さ 120m、最大幅 156m、長さ 211m で世界最大の教会建築である。隣接するバチカン宮殿は、1700 室を擁するローマ法王の住まいである。

ローマ・カトリックは、布教を口実にして民衆の財産を奪って教会を飾っているようなもので、贅沢と装飾過多の極致といって「実記」では嫌悪感をもつ、と述べている。イエスは聖人でその教えは正しかったが、後世の聖職者たちがその道を曲げて教会が政治に干渉するようになり、宗教改革などで何度も是正が求められてきた、と分析している。



フィレンツェ

人口 16.7 万人イタリア第 6 の町だが、都市美が優れて豊か。市内にはサンタマリア大聖堂をはじめとして 250 もの教会がある。ローマ・カトリックはたくさんの荘厳を極めた教会を建てる。その執拗なまでの装飾性には驚くものがある。



コロシウム（ローマ）

西洋文明はすべてローマから始まっているが、今のローマは遺跡の街のようだ。コロシウム（闘技場）は、西暦 80 年に完成し、中央の広場を何層もの観客席が取り囲み、最上階は 60m の高さがある。内部の多くは崩れているが、一部が残っているのでその全体像は十分想像できる。この広場にライオン、トラなどの猛獣を入れて人と戦わせ、まるで芝居を見るように観客が見物したという。



サン・ピエトロ寺院とバチカン宮殿

サン・ピエトロ大聖堂はローマ法王の住まいに付属した教会で、ローマ・カトリックの総本山。教会の建物は高く大きくて隅々まで荘厳を極めている。ロンドンのセントポール大聖堂も大きい、半分程度の大きさだ。今でも王侯貴族や有力者たちはそれぞれ財産を削って膨大な額を法王庁へ寄進している。法王のもつ富の大きさは推して知るべしである。

8-3 文明の栄枯盛衰

イタリアは、国土は肥沃で採れる産物も豊かであるのに、今や貧困な国に陥っている。長い間の政治不安定と圧政によって人々が疲弊し、加えて宗教上の抑圧で知識が広まらずに経済に疎い人々が増えたためと思われる。

イタリアはヨーロッパの近代化の波から遅れ、最近国土が統一されて近代化に向けた動きが始まったところであった。

西洋文明の源はローマにある

古代ローマから都市には必ず噴水があった。何十キロにもわたる水道を 3 千年も前から建設した。この技術の集積が今日の西洋各都市の水道を生んだ。水利用技術の源である。ローマ人は石の選択に長じている。石で建造物を作り、2 千年前の橋が今も交通に使われている。鉱物学の期限である。レンガを焼くのがうまく、壁、家屋、アーチを作り柱を作って梁を支えている。今になっても崩れていない。建築力学の起源である。またローマ人は絵を書く場合リアルな描くことに努め彫刻でも肉体を忠実に表現しようとした。その精妙な技術は今でも及ぶことが出来ない。これが美術の源である。東洋の劇場は四角く、視線が中心に集中しないし、音も聞こえにくい。ところがローマ時代の劇場は円形の建物を採用した。建物の構造が丈夫で、時間がたつほど丈夫になる。これが建築学の起源である。（第 76 章ローマ市の記下）

戦争で得た奴隷が大建造物を作った。

コロシウム、カラカラ浴場、水道橋などはことごとくローマが昔いかに反映していたかをしのばせる。大体ローマに大建造物が多いのは何故か。古代世界では、今のバーバリー海岸で行われている奴隷売買のように奴隷をたくさん持つことを誇っており、猛獣と人を格闘させるほど、人身も風俗も猛々しく、国の支配者が権威と暴虐をほしいままにすることも甚だしかった。遠征が勝利に終わるとその捕虜を奴隷として使役し、その財産を略奪して土木建築に費やし、芝らしい巨大建築を立てた。（同上）

イタリアには貧しい人々が多い

市民の多くは無学で、生得怠け者であり、街中のごみは始末しないし、交通も乱雑である。貧しい子どもが馬車を追いかけて花を押し売りしたり、海岸沿いの町筋には乞食が群れをなし。貧しい人々が籠を枕にして地べたに横たわっている。・・・イタリアには貧しい人々が多い。ローマではフィレンツェよりも貧民が多く、ナポリはローマよりもさらに多い。欧米 12 カ国を歴訪したが、この街のように不潔で、民衆が怠惰で、貧民が多いところはなかった。中国の上海とこのナポリは全く同じようだ。（第 77 章ナポリ市の記）

養蚕発祥の地イタリアで日本の蚕種が仇敵視

イタリアはヨーロッパの養蚕発生の地で、ローマ時代からこの産業があった。17C に内乱で養蚕が衰え、優れた技術者が他国へ流出し、それからフランスのよう産業が盛んになった。・・・かつて日本の蚕の種紙を初めて買い入れて養蚕を行ったところ、一枚の種紙からもっとも優秀な人は 50 kg の繭を得たことがある。しかし近年次第に成績が落ち、現在では平均 15,6 kg の収量に過ぎない。・・・昨年日本から輸入した蚕の種紙を試験したところ、50 枚のうち病気がないものはわずかに 2 枚だった。そのため日本の蚕種がイタリア国民を破産に追い込む災いの元であると仇敵視するようになった。これが日本の種紙の価格が年々低下し、輸出が途絶しようとしている理由である。

（第 78 章ロンバルディア及びベネツア市の記）



ピサの斜塔

フィレンツェから南へ 1 時間のピサ市にある。当初から斜めに建てられた、科学者も不思議なことだと言っている。

その途中のパドアというヨーロッパ養蚕業の発祥地に立ち寄った。近年蚕の黒死病がはやり日本から買い入れた蚕種で育てたところ、大変生育がよかった。しかし数年後輸入した日本の蚕種が悪質化し、病気で繭を作る前に死んでしまう状態になった。そこで政府は養蚕学校を立てて優れた蚕種確保を始めた。日本の蚕種がイタリアを破産させる災いのもととして仇敵視している。日本の蚕種の価格が年々低下し、輸出が途絶しようとしている原因がここにあった。



サンマルコ教会の広場（ベニス）

広場が 3 方を建物囲われている。人はアーケードの下を歩く。交通は馬車の代わりに舟を使い、道はやっと人が通れる程度の幅しかない。狭い街筋が多く、東京の路地とそっくりだ。馬車がないので車輪の騒音がない。広場は、常に男女同伴で商店の前を散策している。夜はガス灯をつけ、夜中まで白日のように明るく、楽しい歓楽の町である。

9 西欧の政治、経済、文化の状況

一行は、建国 100 年のアメリカで自主・独立の市民を見だし、島国・イギリスでは貿易に支えられた産業立国を見た。フランスでは、鎮圧されたばかりのパリ・コンミュンに文明国の中で起こる階級格差をみて、統一帝国になったばかりのドイツではビスマルクの「力による外交政策」を見てきた。農奴解放によって近代化が始まったばかりのロシアはこれまで日本が最も恐れていた国であったが、実はヨーロッパでは最も遅れた国に過ぎない実態から日本の脅威ではないことを見た。

また、本稿では取り上げなかったが、ヨーロッパのその他の小国では、北部九州 4 県ほどの面積、人口しか擁しないオランダやベルギーの例のように、欧州の交通の要衝という地の利を発揮して鉄道輸送や運河を利用した水運輸送に力を注いで世界貿易に影響を与える地位を確立しており、経済力の面でも大国と並ぶ実力を有している。小国とはいえ各国が国民の勤勉さと緊密な協力関係のもとで、それぞれ独自の個性を発揮し、大国に伍して自主独立する姿を見た。

一行は西欧訪問を通じて、西欧諸国の中にも発展に格差があって、国により政治、経済、文化に著しい違いや特徴があることを知った。また、ウィーンの万博では、西欧の競争社会の激しさを目の当たりに見た。そこで、久米は、政治経済などのいくつかの分野について国ごとの比較を行っている。

9-2 ウィーン万国博覧会

ウィーンで第 6 回万国博覧会を視察した。

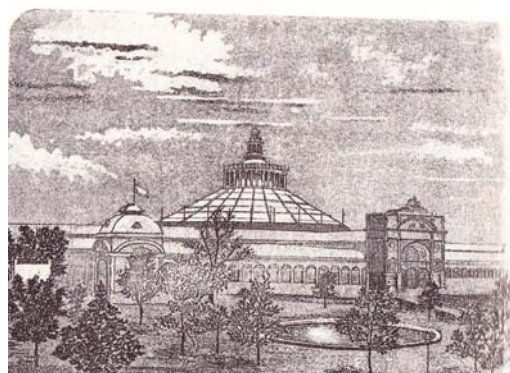
一行は 6 月 7 日から 12 日間ウィーンに滞在し会場を何度も訪れている。日本は漆器、寄木細工、染革などの出品と神社を配した日本庭園を造成し、日本ブームもあって好評だったようである。

万博というと 1862 年に「大君の使節」もロンドンで開催された第 4 回万博を視察した。同行した福沢は、「博覧会は元と相教え相学ぶの趣意にて互いに他の所長をとりて己の利となす。・・・また、各国古今の品物をみればその国の沿革風俗、人物の智愚をも察知すべきが故に愚者は自ら励み智者は自ら戒め、もって世の文明を助ること少なからず」（『西洋事情』）、と述べている。

一行もまた同様の考えで、視察を通じて、工業の有用性は贅沢品よりも日用品の分野で大きい。しかも工業の発展は生活を便利にするだけでなく、デザインも洗練される。人の勤勉さが洗練さを追求し、製品にも表れている。

工業技術の点では、大国も小国も互いに譲らず、互角に競争がされている。各国に経済発展の差はあるが、博覧会で大国小国を問わず独創性に満ちた展示を見て、各国が工業発展を競い合い、貿易に力を注いでいる様子を再認識させられた。その産業上の競争はあたかも「平和の中の戦争のようだ」と述べている。

まことに博覧会は、今日ではコンベンションと呼ばれて観光と並ぶ集客産業に成長しているが、その起源は国の産業の技術・デザインの発展、広報宣伝にあったことがよく分かる。



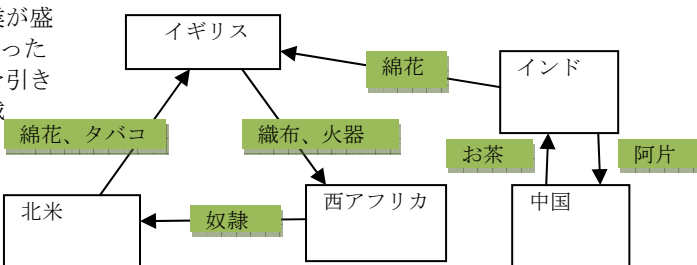
ウィーン万国博覧会（1873 年）

明治政府が初めて公式参加し日本館を出展たことで有名である。ドナウ川沿いのブラーテル公園の中に、高さ 84m、直径 108m の大ドーム（ロータンダ）を中心に、左右に 16 棟のパビリオンを配して 35 カ国が参加した。

9-3 西洋の経済

ヨーロッパの産業が今のように活発になったのはさほど古いことではない。資本を蓄積し、機械の発明と労働力及び広大な海外植民地を得ることで、18C末頃からイギリスで始まった産業革命が、その後、ベルギー、フランス、アメリカ、ドイツへ伝播して資本主義を急速に発展させた。これにより、資本は絶えず市場の拡大を図るようになり、工業化によって都市へ労働者が集積し、労働問題も発生した。

イギリスでは従来から手工業による毛織物工業が盛んで、新大陸へ輸出していた。18C末から始まった工場制機械生産による産業の変革と社会変化を引き起こし、毛織物工業で蓄積された資本が、機械の発明による紡績機とアメリカやインドから輸入した綿花を利用して、綿織物工業を発達させた。このイギリス綿織物は、アメリカ、西アフリカと三角貿易を形成し、世界の市場を席卷し、綿織物や機械生産でイギリスは世界の工場となった。



右図は、イギリスの三角貿易の概念図で、17C中ごろから始まった三角貿易は、西アフリカから北米へ奴隷が輸出、北米からイギリスへたばこが輸出、イギリスから西アフリカへインド産綿織物が輸出された。しかし、18C半ば以降は、インド綿花がイギリスへ本格的に輸出され、インドから中国へアヘンが輸出される変則的な構造になった。もちろん、日本はこの三角貿易の範囲外にあった。

国の繁栄の源泉は経済力にあるが、久米は経済力は生産力と商業・貿易の発展によると考える。そこで、一行は、この各種産業の生産力の発展とともに、生産物の販売・消費を扱う商業に対して大きな関心を寄せて視察した。訪問した他諸国で元首から市民に至るまで、誰もが日本との親睦と貿易の拡大が望まれたことに驚いている。国益の競争は商業で決まるとまで述べて、貿易の振興について輸送手段の開発と、レアル（市場）、穀物市場、取引所などの重要性を強調している（ヨーロッパ州商業総論）。

西洋の経済状況（欧米回覧実記から抜粋）

アメリカ	●炭鉱が多く、製鉄業が盛ん。鉄は機械、農機具、紡績機械に用いられる。繊細な贅沢品、ファッション品、趣味品は得意でない。機械技術は世界一というが、ドイツの精密さ、イギリスの品質、フランスの優美さに対して仕上げが荒っぽく、野暮である。●広大な土地があり、農業がアメリカの主力産業で、オランダ家畜業はアメリカから干草を輸入に家畜を数倍に増やした。イギリス織物業者は綿花を輸入。●アメリカはヨーロッパへ農産物を輸出し、綿織物などの工業製品を輸入しているため、工業製品の輸入に高い関税をかけて自国の工業生産を奨励している。
イギリス	●イギリス工業で最大の利益を得ているのは綿紡績。国内消費は8分の1でほとんど輸出に回る。次いで、羊毛紡績、鉄が続く。金銀銅の細工、皮革製品、ゴムは有名。陶芸技術も近年盛ん。しかし、これらは国内需要が多く、輸出へ回らない。●発明された機械と蒸気力を利用した工業生産によって「世界の工場」となっている。アメリカやインドの綿花、西インド諸島の粗糖を輸入し、織物、精糖にして世界中へ輸出する。●食料品と原材料を輸入するが、綿花などの原材料の一部はイギリス経由でヨーロッパ各国へ再輸出され、そこでも利益を得ている。
フランス	●工業生産物は優秀で欧州一で、技術は精緻、機械も巧緻。デザインが優れ、仕上がりが美しい。欧州の流行は仏から始まる。最も美しいのは、コブラン織り、セーブルの陶磁器、リヨンの絹織物、造花も有名。羊毛の貿易も大きな収益源。英工業は機械の力によっているが、仏工業の場合は手の技術と機械力が協力している。●ヨーロッパ大陸内部の近隣諸国間貿易の中心である。工業製品はパリに出すと価値が上がるので、各会社は競ってパリへ営業所を置く。
プロイセン	●プロイセン、ザクセンが中心。綿紡績、ゴム製造、マイセン陶磁器、シュレジアのガラス器具。兵器ではクルップ砲など。●ヨーロッパの地理上の中心地になる。貴族や有力者の消費も多いので今後重要な貿易国になる。
ロシア	●蒸留酒・ビール醸造、麻織物、亜麻織物、綿紡績、皮革類がロシアの物産の代表。●輸出の半分と輸入の4割が独、英に握られている。●国富は帝室と貴族に集中し、人民は貧しい。経済全体も発展途上で、貿易の自主性も乏しい。

9-4 西洋の政治

使節団の政治調査の課題は、周知のように、天皇を中心とする一元的国家像を探ることであった。

一行は、アメリカの共和政が自主独立の精神が行き渡った国民の上に成り立ち、イギリスの立憲君主制は確立された市民や企業の自由の上に成り立っていることをみた。フランス共和制では不安定な政権の下で、国民が何をしたいかで政体が簡単に取り替えられる様子も見た。ドイツの利権君主制では連邦各国を構成する王侯貴族が権威を持っていた。ロシアの専制では皇帝（ツアー）の意向が法律であった。

ロシアを別にして、首長を定めて行政権を委ね、公選議員が議会を構成して立法権を持つのが欧米の一般的な形である。首長を公選にすれば共和制で、世襲にすれば君主制である。首長の力が大きければ専制となり、社会に優れた人物が多ければ首長の力をセーブして共和制になる。専制、分権、共和制などという政体は、外観は違って見えるが、内実は大同小異だった。共通しているのは、国民が快適な暮らしを目的に経済生活に努力して勤勉に働いている社会にあって、政治の役割は人民の言論の自由、参政権の確保と人民の生命・財産の保護であった。

「実記」では、我が国の国家像をどうするかに直接触れた記述はないが、イギリス風の立憲政体に関心の中心だったことは言うまでもない。

木戸は一行が帰国する直前のM4年9月に「憲法制定の建言書」を、大久保もまた同年11月に「立憲政体に関する意見書」を提言した。維新時から叫ばれた「公議輿論」（議会制による合意形成）にそって、彼らが提案したことは、立憲政体、二院制議会であった。使節団が欧米の様々な近代国家を見て、調査してきた成果が色濃く投影されていると思われる。

国	政治体制	特色
アメリカ	共和制。37州が連合した国。連邦政府は3権分立が徹底され、国会はアメリカ最上の立法府。上下2院制で、上院は各州2名、下院は人口比例で選出。上院議長は副大統領。行政の長は大統領で、軍隊の最高司令官をかねる。大統領は、大使任命権と条約締結権を持って外交権を掌握するが、内政上は弱い。	●州には独自政府が認められ、人民に密接なものは州の裁量。連邦政府は、州の施策が合憲かどうかを見るだけで、ワシントンで各州の実情は分からない。●各州は自主独立で、互いに競争している。建国と開拓の歴史に沿うもので、人民に自主独立の精神が行き渡っているためである。
イギリス	立憲君主制。国王の承認を得た首相が内閣を構成して行政権を行使する。国王は首相の助言に基づき議会（庶民院）を解散する。国王は、首相に対して、相談を受ける、助言する、警告する権利を持つ。 国会は立法府で、選挙で選ばれた庶民院と世襲の貴族、聖職者らの貴族院の2院制	●イギリスの政治はアメリカと異なり、首相が国王を補佐し、事あるごとに国会で議論をまとめる役割を果たして立法と行政のバランスを図っている。●ウェストミンスター周辺では王権の権威が行き届いて立憲政治の価値が高く、シティや地方都市では企業の自由が確立していてあたかも共和制のように見える。田園地帯では貴族の権威が強くて貴族の専制のように見える。三様の政治を併せ持つのがイギリス政治で、微妙なバランスがあるように感じた。
フランス	共和制。この80年間に権力が6回変わった。 第1共和政 1792年～ 帝政 1804年～ 王政 1814年～ 第2共和政 1848年～ 第2帝政 1852年～ 第3共和政 1875年～	●王党、ボナパルティスト、共和派、コミュンなどいくつも政党がある。●人々が自由で拘束を嫌うので、国内情勢はいつも不安定。統御する人材を得れば国は四方に発展するが、指導者がいないとたちまち内輪もめが始まる。
プロイセン	立憲君主制。ウイリヘルム一世がドイツ皇帝で、ベルリンに中央政府があり、選挙で選出される衆議院（下院）と王族・貴族からなる貴族院（上院）で構成する国会が立法機関。行政権は皇帝と執政（ビスマルク）がもち、皇帝は外交権、交戦権も有する。	●1866年普墺戦争に勝利して北ドイツ連邦結成。オーストリアをドイツ国家の枠組みから追放。1870年普仏戦争に勝利し南北ドイツが連合してドイツ帝国が成立。ウイリヘルム一世が皇帝に就任。
ロシア	専制。皇帝アレクサンドル二世の独裁下で国家評議会、大審院（元老院）、大教院（宗務院）が政府を構成。しかし、いずれも皇帝の支配下にあり、皇帝の意向が法である。	●クリミア戦争の敗北で、近代工業の立ち遅れが明白になり、1855年即位したアレクサンドル二世は近代化のため農奴解放を実施。4,700万人が解放されて、工場労働力を大量に生み出して資本主義化を進めた。

9-5 西洋の文化

政府の改革、学校、新聞社、鉄道、電信、兵制、工業、商業など様々な事柄の視察を通じて、使節団は知識、道徳から政治、経済、衣食住に至るまで西洋文明に美点を見出した。以下にそのいくつかの事例を挙げる。

しかしながら、すでにこのとき国内では、西洋文明は日本のそれより数段優れているかもしれないが、西洋文明のすべてがわが国に勝っているわけではないとして文明の取捨選択の必要性が叫ばれていた。福沢諭吉、中江兆民らである。福沢は、伝統と欧化について日本のアイデンティティを維持しながらどこまで欧化してよいかを考えていた。

(1) 空理空論から実学へ

① 草木園と植木屋

西洋の草木園は動植物の生態を観察するための施設で、日本の植木屋は珍獣奇木で人を驚かすためのものである。外観は似ているが目的は大いに異なる。欧米では人の興味を集めて実際の知識を与えて産業や学問を活発にすることを狙っている。日本では抽象的な議論にふけり目前の利益しか求めている。

(第3章サンフランシスコ)

② 指導者

アメリカの指導者は、熱心に宗教を信仰し、高尚な学問より基礎教育に力を注いでいる。移民労働者に善悪の判断力を持たせるために宗教を利用している。こうして民心を1つの方向にまとめ殖産興業のもとを育てている。日本では、上層階級は高尚な空理、浮ついた文芸を学び、人々の生活上の切実な仕事は卑しんでいる。中流階級は守銭奴であるか偶然のうけだけを考慮しており、下層階級はその日暮らしの状態だ。肥沃な国の民衆は怠け者といわれるが、肥沃でも人の力を用いなければ何も生まれない。(第7章ロッキー鉄道の旅)

③ 英国の富

英国の富は石炭と鉄で機械を製作し、綿、毛、麻を紡績加工して生まれている。その原料は東洋や南洋に依存している。逆に、東洋の人は物を製造する仕事をしないので製品を西洋に依存している。東洋人は天然資源で西洋の産業の成果を買うのである。東洋の人民は怠惰である。西洋に及ばないのは、才能が劣るためでなく、高尚な空理空論に時を費やして経済的知識が乏しいためである。

(第33章ニューキャッスル上)

(2) 古いものを大事にして進歩を図る

① 博物館

●博物館を見学すればその国の文化の由来がわかる。歴史は、先駆者の言動が後世の者を刺激して次第に進むのであり、進歩は古いものを投げ捨てて新しい物を次々取り入れ得ることではない。博物館ではこの発展の歴史を展示している。古代の拙い技術のみて生みの苦しみに思いをはせ、精巧なものを見て自分の努力不足を反省できる。進歩の過程を見れば一層勤勉に学習しようという思いがわく。

(第25章ロンドン下)

●パリの図書館で、西欧でも、中世までは古来の文物の保存されず、技術が衰退した。ギリシャ、ローマの彫刻、絵画は今では技術が失われて模倣できなくなっている。史的記録、文書はその時代を知る宝で、できる限り保存しなくてはならない。西洋が日進月歩の実をあげるのには昔のものを大切に思う心があるからだ。

(第43章パリ2)

② 家の修繕

ヨーロッパ人は一旦家を建てる世代ごとに手を入れて美しいものに仕上げていく。中国人は注意深く家を建てるが、修理もせずがたがたになっても住み続ける。日本人は急いで手抜きの建物を造り具合が悪くなると壊して建てなおす。だから、進歩改良がない。(第25章ロンドン下)

●ベネチアの文書館には 130 万冊の本がある。昔からの帳簿、資料が積もってこれほどの数になった。人智が進むと捨てるものがなくなるようで、文化が盛んなところは文書を大切にしている。民間の商取引帳簿は商法や民法の起源となり、政治上の文書や法典は貴重なものである。軽んじると、国の法律さえ根拠をなくす場合がある。西洋では博物館があり、些細なものでも収蔵する。図書館、文書館を設置して廃棄されそうな文書も保存する。これが文化の極致である。

(第 78 章ロンバルディア及びベネチア)

②工業博物館

西洋では、知識が進み交易が盛んになるにつれて、新しい品種を採用し、粗放農法から新しい農業技術へ改め、それでも工業の発展に伴い原料としての農産物は不足している。西洋ではどこの国も、工業博物館を作り、その効果は国民の利益増大にはっきり出ている。1 次産品を加工して工業生産物にするために、原料を見つけ、その性質を知り、加工技術に習熟し、需要動向に合わせれば、需要も増えて価格も上がる。そのために、ロンドンでは常設博物館、エディンバラの産業博物館、パリの展示場があって、目で見たことを耳で聞いて知識を深め、耳から教えられたことを目で確かめて、視覚と聴覚から頭に直接文明知識を注いでいる。ベルリン、ミュンヘン、ストックホルム、モスクワにも博物館がある。(第 43 章パリ 2)

(3)様々な改善すべき事項

①穀物倉庫

リバプールの穀物倉庫は、レンガと石の 6 階建てで、穀物は麻袋で運搬し、バラで貯蔵し、空気乾燥させている。日本では、俵に入れて保存する。そのため湿度が高いと劣化がひどい。これをみると、西洋が合理的で、日本は昔からの因習に縛られて、研究心が不足しているように見える。(第 26 章リバプール上)

②運河

人工的に掘った水路で日本にも京都の高瀬川に例がある。川の両側に道があって日本では人が曳き船するが、西洋では馬が行く。淀川のその光景は恥ずかしい気がする。西洋では水門で水位調整して運河が広く使われているが、日本ではあまり見られない。鉄道や蒸気船があるが高価なので、運河による輸送を進めるべきだ。(第 15 章北部巡覧の旅)

③小麦

西洋ではパン用小麦は常食品なので、どこにも水力、風力、蒸気力を使った粉挽き場がある。アメリカは小麦が多く取れるので大規模な製粉工場があちこちにあり、ベルギーは小麦を輸入して小麦粉を輸出している。ハンガリーはフランスへ輸出している。麦を生産する国は製粉業も起こす必要がある。日本では、コメのために麦は少なく、製粉も麦を水に湿らせてから引くのですぐ痛む。稲作に偏っているのので、乾いた土地は放置し、遠距離輸送の努力をしていない。麦は穀物の中で最も貴重だから、麦生産を増やし小麦粉の生産を増やす必要がある。(第 45 章パリ市 4)

④レンガや石造りの家

西洋には家は地価が高いため地下室がある。地下室はレンガを積んで石膏で固めてある。空気が乾いていることと緻密な家づくりで、内部は乾いて快適である。日本の場合、土壁を使うので湿っぽい。空気が湿っぽいだけでなく、家づくりで乾燥に留意しないためだ。煉瓦や石造りの家は火災を防ぐとともに湿気も防いで有利である。(第 54 章アムステルダム)

⑤未利用地

ヨーロッパでは、山岳でも少しでも土壌があると耕作する。不毛の地は人跡途絶えたところだけである。日本の場合、山野で牧畜することなく、岩山も鉱業などしないで放置している。森林も役立たないとして利益を上げる工夫もしない。漁業と稲作ばかりを重視し、その土地にあった麦、牧畜などを行わない。欧州では国土の 4 分の 3 が耕地であるのに、日本では 10 分の 3 が耕地に過ぎない。ヨーロッパで山や谷を耕さないのは全く耕作に適さないためで、日本の荒地とは性格が違う。(第 73 章イタリア国総説)

(4) 進歩

①大国に伍して繁栄する小国

アメリカはヨーロッパの開拓地、イギリスは世界の工場、フランスは世界の大市場で、この大国に比べると日本は経済力が弱く、問題にならないくらいの国力しかない。しかし、ベルギー、オランダは、面積、人口は九州くらいで土地も痩せた湿地である。それでいて、大国に伍して自主独立を果たし、経済力も大国以上の強さを発揮し、世界貿易にも影響を及ぼしている。人々の勤勉努力と緊密な協力の賜物である。日本の着眼点の低さと共同・忍耐の観念が薄いことが課題である。（第49章ベルギー国総説）

②手抜きの家づくり

ヨーロッパ人は一旦家を建てるとう世代ごとに手を入れて美しいものに仕上げていく。中国人は注意深く家を建てるが、修理もせずがたがたになっても住み続ける。日本人は急いで手抜きの建物を造り具合が悪くなると壊して建てなおす。だから、進歩改良がない。（第5章ロンドン下）

③図面や模型

●造船はビルと同様に一人ではできない。全体の構造は設計で決められるが、実際の製作は別の人々というように細かく分業されている。だから設計図と模型が大切になる。模型があれば、実現可能性がわかるので、開発段階で中断してもその損害は最小限で済む。日本の場合、開発段階の費用を惜しみ、アイデアが浮かぶと大雑把な計画だけで事業着手するので、失敗すると損失が大きい。工業化が進まず、学問や研究が進展しないのも同じ理由である。西洋人の性質は鈍重だが、周到に考えるので難しい仕事も成功する。日本人は機敏だから深く考えない。だから進歩しない。（第27章リパプール下）

●西洋人が事業計画を立てる場合、慎重に進めて、成功しそうになると模型や図面を作り、事業計画書を書いて資金を集める。次に事業免許を得て、仮の建屋を作り、機械を据える。3年くらいで事業の基礎を固め将来性を見極めながら拡充する。日本人は、あっという間に会社を作り、1年もたたないうちにきらびやかな事業所を立てて人目を幻惑させるが、利益はもう減少し始めてくる。性格が軽薄で本当の利益とは何かを理解してないためである。（第51章ベルギー下）

(5) マナー

パーティーに出席した席で、西洋の紳士は言葉使いや飲食のマナーがきちんとしていいる。一般的に酔態は見せないし、喫煙も野放図でない。酒、たばこの消費額は高額になるが、それでもこの風俗は維持されている。日本の場合、おおっぴらに酔うことを豪快、女性のたばこを魅力的、性欲を風流と言っているが、これらは悪い習慣で人々を怠惰にし、健康を害し、人間の自主性を損なうので、最も恥ずべきことである。

（第29章マンチェスター下）

(6) 東洋、南洋

欧州各国は今、文明と富強を競い合い、高層建築が立ち並ぶ都市だが、人々の生活状態を見ると、1年中こつこつと産業に携わり、毎日力の限りを尽くしている。ところが熱帯地方の暮らしを見ると、寒さに耐える衣服は要らないし、家も風雨をしのぐ工夫も要らない。食べて、寝て、眠りから覚めれば果物や穀物が実っている。そうだとすれば、智恵を働かしたり、艱難に耐えて事業を始めようとする志がどうして沸き起ころうか。

地中海を越えてアラビアまで来ると、その怠惰で貧しいことは甚だしく、ヨーロッパで貧しく見えたイタリアなども、天ほども高い文明国の地位にあると仰ぎ見るほどだ。国の貧富は土地が肥えているかには関係ない。人口数も、国民の智力の程度も関係ない。ただその土地の風土や習俗の中で、生活のために努力しようとする力の強弱だけが問題なのである。（第96章アラビア海の旅）

マルセイユから乗船した我々を除くと全員が白い肌、赤い髪の乗客だった。これらの人々は欧州で出会った人々とは違う感じだった。その半数は動作が荒々しく、人を小ばかにするような会話をし、高笑いをしたり女性をからかったり、細かなことにすぐ怒り暴言を吐いた。欧州本国では、教養のない人間の行動で、恥とされてきた。遠くまで乗り出して東洋、南洋で暴利を得て暮らすものは、たぶん本国では小ざかしい連中で、無頼な公道が故郷に入れられず、はみ出し者となったり、刑法に触れた連中なのだろう。だから東洋、南洋で生活手段を求めてくる連中の多くは文明国の棄民である。こういう連中が原住民を虐待し、侮辱している。（第98章ベンガル湾の旅）

10 岩倉使節団の歴史的意義

10-1 明治初期の政治経済状況

明治6年9月13日岩倉使節団は帰国した。

折りしも、新政府の懸案の1つの対朝鮮外交問題で征韓論(出兵論)と内地優先論が対立し、岩倉帰国の3ヶ月前には西郷隆盛を派遣使節にすることとしていた。これに対して、帰国した岩倉、大久保は、使節団留守中は現状維持で新規の事態は帰国後に対応する旨の約束違反を背景に使節派遣は時期早尚として反対し、10月には西郷訪韓中止が決定した。この決定は岩倉、大久保、木戸らによるM6年政変となり、西郷、板垣、江藤ら征韓派が一斉に辞職した。

この政変で大久保ら使節団グループは政権奪取に成功した。また、新政府に朝鮮外交問題解決を先送りすることで独立に向けた国内整備を急がせる意義をもつことになった。独立問題は、幕末以降の指導者が常に悩まされた課題で、西欧列強による侵略は中国の次は日本だという強迫観念であった。福沢諭吉は、「文明論之概略」で、明治7,8年の日本の国際関係上の位置を「西欧列強の東漸以前の無菌状態にいるようなもので、偶然の事情で独立しているに過ぎない、というほどであった(「文明論之概略」)。

当時の国家財政を見ると、廃藩置県、秩禄処分や外国への賠償金支払い(下関賠償金など)で支出が嵩み、国債発行でかろうじて支えていた。歳入はM元年でみると、地租税201万円、関税72万円、その他20数万円の総額300万円で、歳出総額3千万円の9割が赤字国債だった。その後西南の役では1年間の国家予算に匹敵する戦費(4,157万円)を要した。このファイナンスもまた、国債発行と銀行借り入れでまかなった。

こうしたいわば武家社会のリストラに要した費用をどうするか。先回りして述べれば、1881年「M14年政変」で大隈重信に代わった大蔵卿・松方正義のデフレ政策による財政改善や日清戦争等で得た賠償金によって償還していくが、明治初期の時点では、歳入面では地租改正で収穫高でなく土地面積に応じた税を金納化し、歳出面では士族への秩禄支給を大幅に減額した。

新政府は日々の諸課題への取り組みと同時に、新しいこの国づくりに向けて次の事業に重点的に取り組んだ。

- ①天皇を中心とする一元的国家の形成
- ②資本制社会の形成
- ③封建的諸規制の廃止

そこで、政治、経済、社会の面から国づくりの取り組みと問題点を検討する。

(参考) 福沢諭吉の「文明化で独立を保つこと」

福沢はよく日本近代化のイデオログと揶揄される。確かに、徳川幕府の日本を「己惚れの病」(『唐人往来』)と診断し、徳川の太平の間に、西洋では軍備を充実し、蒸気船なども開発して平時も人々が安楽に暮らせる強い国になった。したがって、日本はこれまでの井の中の蛙のような「己惚れの病」から脱して西洋に肩を並べる文明国に転換しなければならない、と何度も述べている。

そのために、封建制度からの「大変革」が必要で、西洋技術による「殖産興業と富国強兵」の実力をつけて、各国と条約を結んで交易・交流し、「世界普遍の原理」と「万国公法」のもとで発展していく必要がある(「西洋事情」)。

「まず当今の急務は富国強兵に御座候」(1862年ロンドンから島津祐太郎あて書簡)。そのためには藩の制度、経営の合理化(洋式化)などと併せて、「富国強兵の下は人物を養育すること」が根本だと述べている。その中核を担う者は国を動かす指導者でも力仕事の下層労働者でもなく、知識力を持って時代を指導できるミドルクラス(中韓階層または知識人)の育成である(「学問のすすめ」)。個人レベルの文明化と独立心育成が福沢をして近代化の単なるイデオログにとどめない点である。

よく知られるように、福沢は、幕藩体制そのものの改変でなく、徳川將軍の下で西洋技術による殖産興業や洋式兵法の採用などの富国強兵策を想定していた。いわゆる「大君のモナルキー」である。そのため明治維新を初めとする急激な改革に驚きつつ、「この状態のまま進んでいくと、政府さえその気になれば有形の文明は徐々に整えられていくだろうが、人民はますます氣力を失い、文明の精神は次第に衰退の一途をたどる」と心配する。人々の精神の独立がなければ国の独立はかなえられない、と福沢はたびたび述べている。

10-2 政治

明治6年政変後の政府は、三条太政大臣、岩倉右大臣のもとで、内務卿・大久保、大蔵卿・大隈、工部卿・伊藤を中心に木戸、寺島、大木、勝の新薩長派政権となり、使節団グループが支配的になった。

クーデターに敗れた板垣、後藤、副島らは、M7年1月「民選議院設立建白書」を発表して、有司専制政治を批判し氏族や豪農、豪商に参政权を与えて君民一体の政体をつくるべきと提言した。この要求は、「維新の功労者」である氏族や豪農らに権利を与えよという不平士族の不満が形を変えたものだった。

政府は、不平士族の憤懣解決を海外に向けて発散させるかのように、翌2月に征韓・征台の決定を行った。また、翌年2月の大阪会議を経てM8年4月には「立憲政体の詔書」を交付して、民主的な政治制度要望に先手を打つ方針を示した。

しかし、海外派兵決定は、M6政変時に内地優先論」を主張した者が政権奪取するとたちまち海外派兵に方針転換した事例で、政権を担う使節団グループの政治姿勢への不信を引き起こした。政権への不信はその後、佐賀の乱、西南戦争に至る不平士族の乱を引き起こした。

M7年の「建白書」のもう一つの意義は新政府の「有司専制」（官僚による専制政治）を批判し、政治を実質的に支える勢力が「藩閥官僚」にあるとした点である。

新政府は、版籍奉還で諸大名から領土を取り上げて政府直轄支配とし、廃藩置県で中央集権化を進めた。その際に、新政府は江戸遷都によって徳川幕府時代の中央官僚体制を存置していた。江戸期の封建官僚制とは、トップの将軍の下で老中、若年寄りなどの幹部とその下に細かく分かれた職制によって幕府政治を運営していた仕組みである。本来は地方領主(大名)が行っていた行政が、江戸期になると中央に権力が集中して、地方官である大名も参加する中央官僚が実質的な政策決定権を握った。これにより、将軍の権威が地方にも行使できるようになった。要するに、天皇を行政府が補佐する政治は、江戸期の老中が将軍を補佐する仕組みと同じで、政治が官僚制に依存する構造を残した。そして元勳たちの存命中は政治家に指導力があつたが、順次官僚側へ移行して行った。

明治新政府は、この江戸期の封建官僚制を活用し、明治元年の官制改革で、各藩から有能な人材を集めて中央官僚にすることを図った。官僚は武士階級の出身者だから政権が薩長土肥の藩閥体制であったため、官僚もまたおのずとその藩閥勢力であった。

実際に、使節団の構成にもその特徴があらわれている。

使節団首脳は、前に見たとおり、岩倉のもと薩長実力者が中心であった。次に書記官をみると、田辺、福地らの旧幕臣が多く、洋学を学んだ者と洋行経験をもつ者がほとんどを占めた。この書記官の多くは帰国後、内務省、大蔵省、工部省の官僚となっていた。旧幕臣層を中心とする使節団グループの官僚が、大久保らの「新薩長政権」を支えており、「建白書」が指摘した「有司専制」は、新薩長の藩閥官僚による政治体制を批判したものであった。

政治が混沌とする時期には、有能な人材が有力者の目に留まると自由に登用されるという情実人事が横行した。しかし、近代国家を担う真に有能な人材確保のため、プロシアの官吏制度をモデルにして、明治19年帝国大学令、20年文官試験補及び見習規則を定めた。一体に、明治23年1890頃までは藩閥官僚が残存したが、大正9年1920頃になると東大出身者になったといわれている。官僚制は期待通りに明治国家の日常活動を担った。日本の場合、官僚は、社会の全階層から登用され、また、首相、閣僚、地方長官(県知事)の供給源としても機能した。その弊害は今日まで続いている。

10-3 経済

視察団は、当初から予定していたとは言え、イギリスにおける機械による大量生産や貿易がイギリスの国富と繁栄の源泉であることに力を注ぎ、その国の産業革命の歴史と各地の工場の経営、生産、労働者、賃金の現状報告について詳しい記述がされている。ロンドンではガス会社の労働者によるストライキも体験したほどであった。

実記では、産業に対しては、生産にとどまらず流通や貿易などの商業・貿易面にも多大な関心を寄せている。リバプールの汽車製造会社で汽車が近隣国だけでなくインドまで輸出されていた、綿織物・綿糸がアメリカの綿花を輸入し製品を逆輸出して大いに利益を上げていたことは、貿易の威力として映ったのだろう。

福沢は、Political Economy に経世済民（世を修め人民を救うの意）を略した「経済」の語を訳した人だが、彼が経済には「人間の衣食住を整理し人をして安楽ならしむる定理」「売買の道を保護しこれを鼓舞して世の貿易を盛んにならしむる理」があり、これを「経済の定則」と呼んだ（西洋事情外編）。定則とは蓄積と投資による拡大再生産と理財の智と商業活動で、経済における生産と流通は一体となった一連の経済活動である。

新政府は、産業機械と大勢のお雇い外国人を先進国から導入して、この国の産業発展を進めた。その基本コンセプトは「富国強兵」で、経済発展は殖産興業施策に基づいて欧米の近代的諸制度をまるごと導入して日本に移植する方法をとった。

M3 年、政府主導で欧米の近代産業をそっくり移植するため民部省から工部省を独立して、鉄道、通信、鉱山、製鉄、灯台事業を所管させた。

- ①**鉄道** M5 年新橋横浜間開通、以降東海道線延伸
- ②**通信** M3 年東京横浜間電報開始
M6 年郵便制度発足
- ③**官営鉱山** 幕府や諸藩の鉱山を国有化して経営。
M1 佐渡金山(新潟)、生野銀山(兵庫)
M3 院内銀山(秋田)、
M4 小坂銅山(秋田)
M6 三井炭鉱(福岡)
M7 高島炭鉱(長崎)、荒川銅山(秋田)
- ④**官営軍需工場** M1 長崎製鉄所(長崎、後に長崎造船所)
M3 大阪砲兵工廠(大阪)
M4 東京砲兵工廠(東京)、兵庫造船所(兵庫)
横須賀造船所(神奈川)

M6 年、民間製造業の保護育成による輸出振興のため、工部省から内務省を分離独立した。これにより工部省＝軍需産業育成、内務省＝民間企業による産業振興体制となった。

1 民間企業育成

- ①M5 年富岡製糸工場 (M7 内務省へ移管)
製糸業を機械化し、輸出商品の生糸の大量生産を図った。官営模範工場工
で、各地から工女を雇いその後全国の器械製糸所へ派遣した。
- ②M9 年 札幌農学校へクラーク招へい
- ③M10 年 三田育種場
- ④M10 第 1 回内国勸業博覧会

2 金融整備

- ①M4 新貨条例(金本位制)
- ②銀行制度 M5 国立銀行条例
M9 三井銀行設立(民間銀行開始)

こうした強引とも見える上からの産業化は、使節団が構築し、新政府の国づくり戦略として採用された「富国強兵」策として実施された。

いささか先走って言うと、いうまでもなく、当初は、富国に力点が置かれた富国強兵であった。しかし、M20 年頃から、力点異動が生じて、やがて強兵富国に転化していった。最後には挙兵貧国になり下がったという皮肉屋もいるほどだが、政治シンボルとしての富国強兵はいくつかのジレンマを内在していた。

10-4 気風の改革(封建的規制の廃止)

西欧列強がひたひたと迫るアジアの一角で開国した日本では、これまでの検討で、政治面では天皇を中心においた立憲君主制、経済面では富国強兵策で、独立を確保する路線が決まろうとしていたことが明らかになった。社会面では徳川時代の儒教倫理に代わる新たなモラル・タイの構築が求められていた。

急激な文明開化の進展で、封建的諸規制は次々と廃止されて日本社会は大きく変化していた。

M1 年神仏分離令

M2 年秩禄処分・・・華族、士族の家禄と維新功労者の給与について約 31 万人の秩禄給与が廃止されて多くの武士が経済的基盤を失った。

M2 年関所廃止、株仲間の独占権廃止・・・営業自由化、移動自由化。

M4 年廃藩置県

M6 年地租改正・・・米年貢を金納化し政府収入を確保した。税(年貢)の算定根拠を石高(収穫量)から土地価格とし、土地の一筆ごとの所有者を決定して地価の 3%を地租とした。

古習を一掃する改革が進み、廃藩置県では大名を華族、侍を貴族にし、廃仏毀釈では寺を宮、僧侶を神官にした。その結果、家老が兵卒になり、博徒が太政官御用達、足輕が県令になるなど価値意識の急激な転換が生じて一種の「精神的真空状態」が生じている(「文明論之概略」)。

文明化とは、物質文明と精神文明の複合物であるが、文明の精神と外形(建築、産業から衣食住、生活様式まで形があるものを指す)を分けると、外形の西洋文明は採長補短主義でよいかもしれないが、文明の精神の摂取は簡単ではない。

「人民はあたかも先祖伝来の重荷を下ろし、未だ代わりの荷物を担わずして休息する者のごとくなり」。精神のアナーキー状態にあって、儒教に代わる新しいモラル・タイを醸成する「気風の改革」の必要性和緊急性については使節団も早い段階から気付いており、ことあるごとにその改善を提言している。「西洋の文化」で述べたとおりヨーロッパにいて日本を振り返って気がついた古習の弊害がその事例である。

女尊男卑や娼婦などの男女間の風俗、キリスト教の熱心な信仰などの東西文化の基本的な違いはあるが、草木園で見た空理空論に対する実学の尊重、博物館におけるアーカイブスの精神、家の修繕で見た進歩改良の精神、造船所の図面や模型で見た計画的で慎重な事業の進め方などについて鋭い指摘がされている。いずれも今日の我々でも納得できるものだが、実記はこれらの貴重な気付きがその場限りの指摘に止まっているのがもったいない。

これらの古習の「惑溺」の弊害について、福沢は帯刀の事例を使い、一步掘り下げて、物の働きを忘れてしまって「もの自体」をありがたがる思考傾向にあると批判している(概略)。その視点からみれば、旧物を廃棄してただ新を求める様子は、かつて昔の物を信じていたと同じ精神態度で新しいものを信じているだけで、惑溺に対する精神革命がなされていない。惑溺の思考様式に変わりがないと見える。

人民が精神的アナーキー状態に陥っているのは、怒涛のように流れ込んでくる西洋文化を改革と称して政治家や知識人が易々とそれを受け入れことに対して、それらの制度や物質に付随している思考様式などの精神面の改革が伴わず、昔の思考様式に継ぎ足すような脆い受容を平気ですることによる大きな不安感、危機感をもったためであろう。

①伝統と欧化について、日本である上でどこまで欧化してよいか。

②制度改革が先か精神革命が先か。

残念ながら、実記はその疑問への回答はしていない。この課題は、実はいずれも、現代に至っても未解決の課題である。

11 おわりに

「実記」に書かれた明治日本人の初めての西洋体験の驚きや困惑は、その 10 年前の「大君の使節団」の経験と重なる点が多い。しかし、岩倉使節団の隠れた役割には、10 年前の大君の使節団の追体験ではなくて、そこで得た教訓をばねに課題解決に向かう点もあったのではないだろうか。

開港前後の横浜港を見ればわかるとおり、港には連日イギリス、アメリカ、フランスなどから多くの船が出入りして、怒涛のような文物の西洋化が始まっていた。日本は開港によって国際社会の一員に参入したのであるが、居留地では西洋人が貿易を仕切り、利益を独占して、彼らが街を闊歩していた。ここでは独立したとはいえ、植民地の上海と比べてもあまり変わらない全く弱々しい独立の姿しかなかった。

M4 年横浜港で「マリア・ルース号事件」が起きた。入港したメキシコ船から奴隷として使役されていた 100 名を越す中国人が解放を求めて運上所（税関）へ訴えてきたため、時の県令・大江卓が国際裁判によって人道的見地から彼らを解放した事件である。この事件では日本の人道的配慮が賞賛されたが、初めての国際裁判の中で、憲法もない国とは独立国と呼ばないこと、奴隷売買は西欧では正当な経済取引の一貫でこれを拒むと貿易が停止するおそれがあること、人道主義なら国内の娼妓制度も抵触することなどが争われた。政府はこの事件を機に、娼妓制度廃止を行って対抗した。

「大君の使節団」に参加した福沢諭吉は、すでに述べたとおり、M8 年頃の日本人は精神的アナーキーに陥っている、とみていた。維新以降、政権が変わり、盛んに学校を建てて工業振興や軍備強化などの急激な文明開化が進んでいるが、押し寄せる西洋列強に対して独立は難しいのではないかと。政府と国民が助け合って国の独立を維持すべきなのに、政府だけが頑張って国民がモラル・タイの状況が続けば独立の見通しは暗いのではないかと、と多くの人々も考えていた。

独立とは「西欧的国家システム」といわれる国際社会に日本が自主的に加入することである。そのために、第 1 に日本が「国民国家」になること、第 2 に「主権国家」になることが不可欠である。しかし、福沢の見立てでは、「日本には政府はあっても国民なし」（「学問のすすめ」）の状態であった。

これらの諸課題に対して使節団は、課題の問題性については至るところで説明しているが、具体的な解決策までは提示できなかった、と思われる。たしかに、政治面では強固な官僚制に支えられた立憲君主制国家の道筋はついた。岩倉使節団を歴史研究の観点から取り組んできた田中彰先生は、木戸や大久保の憲法意見には視察結果が色濃く反映されている、「米欧のブルジョア国家の原理や 19C 後半の国際政治の実態を踏まえ、それを認識した上で、いやそれゆえにこそ、独自の近代天皇制国家の構築を目指した」のが、使節団の位置づけだろうと述べている（田中彰「実記」）。

しかしながら、経済社会面では、なりふり構わない脱亜入欧主義が形成された。今日、新自由主義派の泉三郎は、「技術文明は積極的に摂取して開化を進めていくが、宗教を初めとする風俗習慣については日本独自の路線を目指すべき」ことを明らかにしたもので、『和魂洋才』の原点」と評価する（新欧米回覧の記）。

私はこの実記に和魂洋才の原点があるなどとは考えない。この書のどこにも守るべき魂など書かれていないし、誰もこれが和魂だなどといっていないからである。だから中江兆民が使節団に対して文明に目が眩んで精神を忘れたようだと言ったのである。開港時から始まった西欧文明の流入は、良識ある市民なら誰も「伝統と欧化」についてどこまで欧化してよいかと不安視させたし、福沢らはこのままでは独立するおぼつかないと危機感を募らせていた。

要するに守るべき「和魂」などはなく、独り政府だけがやみくもに西洋化を進める中で、福沢らの知識人は、市民に対して地道に市民生活を充実する道を提唱した。

だからこそ、福沢は次のように述べている。「商売に励みましょう。法律を議論しましょう。工業を盛んにしましょう。農業を広めましょう。著書・翻訳書・新聞を刊行しましょう。およそ文明に関わる事柄はことごとく我々の仕事と考えて、国民の先頭に立って政府と互いに助け合い、官の力と民の力とのバランスをとって国全体の力を増し、この国の弱々しい独立をしっかりとした基礎の上へ移動し、外国と対等に争える文明を築くのです」（M7 年「学問のすすめ第 5 編」）。

これを日本は、何度かの経済恐慌、食糧危機、関東大震災、ファシズム横行、戦争と敗戦、占領といった恐ろしいほどの犠牲を払って、100 年後の 1980 年代に至って何とか達成したのである。